

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

12



第七十九卷 第十二号 日本幼稚園協会

幼児の造形とその指導

網干正裕・編 B 5 判・56頁・1,600円 円 300円

子どもは物作りの天才です！

さまざまな造形技法とその指導上の留意点がきめこまかく紹介されていて、初めて保育に携わる人でも安心して、造形にとりくめるように編集されています。イラスト・カラー写真など多数掲載。

幼児の造形と その指導

網干正裕 編



こども自身が遊びをつくりだし、みんないっしょに遊べます。

幼児の手遊び・指遊び

仲田安津子著 B 6 判・144頁・900円 円 250円

指遊び、数遊び、ジャンケン遊び、語りかけ遊び、コチヨコチヨ、問答遊び、名称遊びの七つをイラスト付で紹介。いずれも体全体を使つての遊びで、二、三歳児から遊べます。

幼児の手遊び・指遊び



仲田安津子

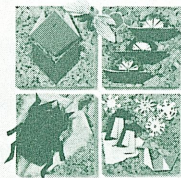
みんなで たのしむ

折り紙あそび

荒川智子著 B 5 判・64頁・1,200円 円 250円

子どもにも折れるやさしい折り紙作品100余を美しいカラー写真で紹介。誕生カード、室内構成のアイデアもあり、明日の保育を楽しくしようという時の虎の巻としておすすめします。

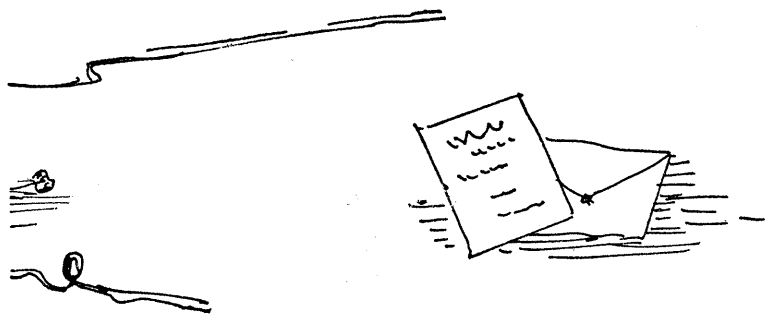
みんなで たのしむ 折り紙 あそび



幼児の教育

第七十九卷 第十二号





幼児の教育 目次

——第七十九卷 十二月号——

© 1980
日本幼稚園協会

表紙 駒宮 録郎
カッ ト 中島 英子

汝がつけば吾がうたひ……………河 辺 杲……………(4)

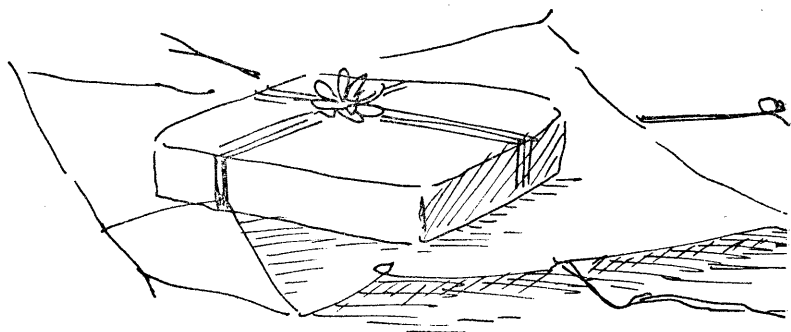
私の幼児教育論

——幼児の遊びと幼稚園教育——……………原 岡 一 馬……………(7)

私の保育……………関 史 子……………(14)

倉橋惣三の保育思想の研究

——その成立・展開・継承をめぐって——……………下 山 田 裕 彦……………(20)



子守唄から母性を考える……………荒川志津代…(30)

★海外文献紹介……………(42)

私のシルクロード⑦……………横張和子…(44)

遊びの発見③……………有木昭久…(50)

〔短日断章〕 すもう……………豊田一秀…(58)

七十九巻の終りに……………津守真…(60)

第七十九巻総目録……………(61)

編集委員 中村 英勝・堀合 文子
 本田 和子・豊田 一秀
 編集主任 津守 真・皆川美恵子

汝^ながつけば

吾^あがうたひ

河 辺 杲

“……ひふみよいむな 汝がつけば 吾がうたひ あがつけば なが歌ひ つきて歌ひて……”

良寛が「手毬^{てまり}をよめる」として詠んだこの長歌の一節には何か私の心をうつものがあり好きである。時々ふつと想いだしたように口ずさんでいる。口ずさんだからといって良寛の心境になれるものでもなく、心境になるとか近づくとかそのような大それたことを考えるまでに良寛の游戲^{ゆげ}三昧^{さんまい}の姿^{けいし}が彷彿^{ふふ}する。「遊」とせず「游」としたのは水に浮び水とたわむれ、水とともに流れるという字画の趣きを愛した良寛が好んでこの「游」の字を書いたのだそうだ。

きつと毬^{てまり}を両手でさするように大事にしながら童女に手渡し、童女が毬をつけば “……ひふみよいむな……” と何人かの他の童女らと歌いつづけている姿を想い描くことができ、読経できたえた美しい張りのある律動の歌声として聞えて来る。彼の詩や書にみられるリズムがそこにあるように思う。

きょうこの頃の街角や裏庭に、なわとびの姿はあっても毬をつく姿はあまり見かけなくなっているのはどうしたことだろうか。

幼稚園の庭で先生と子どもが時折毬をつく姿を見つける。毛糸でくるんだ球体を第一の恩物として子どもと遊んだフレーベルが重なって来る。不思議なことに良寛が生れた宝暦八年（一七五八）の二四年後の一八五二年にフレーベルが生れて良寛は七三年、フレーベルは七〇年、それぞれ激動の世界に生涯を送っている。


この両者が共に子どもと遊ぶ媒体に球体を用いたことも面白い。この両者の遊戯比較論は別の機会にゆずるとしても、ほぼ同時代に東西の洋を超えて人間の根元的なものがうかがえることも事実である。

子どもと保育者の保育実践をつぶさに見なおしてみる時――いままさに両者のかかわりの中におこっている事実をじっくり見つめる時――単なる方法技術としてのかかわり方ではなくかかわりのあり方が重要であることに気がつくのである。

しかもこのかかわりのあり方を決定づけるものは、真剣に遊びにうち込む子どもには真剣にいっしょに遊びながらかわることが大切であり、すなおな子どもには保育者自身がすなおにかかわることの大事さ、つまり子どもと保育者とは真むかいになって成立している「生の事実」がそこにあることに気づくのである。この人間と人間が真剣に向かいあってそこにおこっている「生の事実」をじっくりみつめ、これを明らかにしながら日々あらたな子どもとの生活を続けていくことが保育実践でもあり、そのかかわりの中で動いている子どもともう一方の保育者自身の動きを同時に問題にし検討することが保育実践には欠かすことができないように思う。

そこには立往生といった一瞬動きの止まる状況もあろう。しかし動きは止まってもお互いの

心の中では何かがおこっている場合が多い。また子どもの帰ったあとからあと味の悪さや心残りを感ずるときもある。

「……ながつけば あがうたひ あがつけば ながうたひ つきてうたひて……」というリズムカルな呼応関係も機械のように続くわけでもなく、ある時は早くある時はおそくなったり、毬をはずすことで動きが止まってしまうこともある。お互いが心を動かし、息をはずませて交^{まじ}わっているのである。地方によっては仲間に入れてほしいとき「まぜて」と言うところもある。ところでこの「交」の甲骨文字は「」で両脚を組みあわせ交わらしている象形で「X」と同形の字だといわれる。「X」の字は「本来異質のものが、異質性を保ちながら一緒に存在すること」であり、そこには新しいものが生み出されるという意味も加わる。ある一点で同じ場をもつことによって全く新しいものが生れる。

それはまさに新しいイメージのわいてくることでもあり、またそのイメージを共有することでもあり、さらにまた次におこる新しい動きそのものを意味するように思う。「學」や「教」の中にも「X」の字が見られるのも面白い。

交わりつつ新しいイメージがわき、そのイメージを共有しつつ新しい動きが生ずるときその交わりはほんものである。

リズムカルなはずみをもった交わりをたのしんだ良寛の心がほのぼのと見えて来る。

(洗足学園大学)

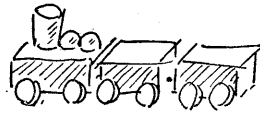
私の幼児教育論

—— 幼児の遊びと

幼稚園教育——

一、遊ぶ子ども

朝九時半頃幼稚園に行ってみると、子どもたちがいろいろな遊びをしている。室の中では、ままごと遊びや積木遊びをしている子どももいれば、粘土遊びや折紙遊びなどに夢中になっている子どももいる。中には一人で絵本を見ている子どももいる。戸外を見ると、鬼ごっこ、砂遊び、ドッジボール、スクーター乗り、スベリ台、ブランコ遊びなど楽しそうである。他の子どもが遊んでいるのをじっ



と立って見ている子どももいる。しかし、他の子どもの遊びの動きに合わせて顔をほころばせたり、体を動かしたりして、自分も遊びに加わっているような感じになっていないかと思われる子どももいる。

ほとんどの子どもが一生懸命に何かをしている。その顔は生き生きとしている。一斉保育の中でときどきみられるような退屈さや緊張感などはほとんどみられない。

これは、いわゆる「自由遊び」の時間に見られる子どもの一般的な姿である。子どもはその遊びを他から強制されてやっているの

原 岡 一 馬

ではない。面白くて、やりたくてたまらないからやっているのがある。

戸外で虫を見つけると、他の友達にそれを知らせ、そのうち何人かが集まって虫を見る。すると、その中の一人が、「この虫の名前は何だろう」と問いかける。「それは図鑑に出ていたよ」と別の子どもがいつて走って図鑑をとりに行く。

それらは与えられた課題でもなく、やらねばならない活動でもないのである。しかし、他者から指図されなくても、子どもたちはその一連の行動を自から喜んでやるのである。大人のだけれがその行動を止めさせ、他の行動をやらせようとしても、「いやだ」とか「図鑑をみて調べるまで止ってよ」とかというに違いない。

このような一連の行動は子どもの好奇心をそそるような遊びであり、対象である。自分たちで発見したり興味をもった課題は強い動機づけを惹き起すものであり、子どもを生き生きとさせるものである。

子どもは、遊びが仕事であり、生活である。それを通して、知的にも感情的にも発達し、社会性や体力が養なわれる。全体的パースナリティの発達も遊びを通して育成されるのである。

二、遊べない子ども

子どもは遊びが好きで遊びを通して成長するものだといつても、子どもを長時間園庭に出しているだけでは、すべての子どもにとって有効な結果を生む遊びになるとは限らない。友だちとの遊びに入りきれず孤立したり、自分で楽しめる遊びを見出せなかったり、遊びに飽いて退屈したりして、生気を失う子どもがでてくるものである。

反対に、大人がいちいち手をかけて、そのオモチャはいけないこのオモチャで遊びなさいと指図しても、子どもは必ずしも喜んで遊ぶわけではない。大人には何でもない木片や紙片や布片が恰好の遊び道具となるものである。大人が設定した環境や枠組は、子どもが強制されたものだと思取ると、如何に面白そうな道具でも放棄してしまう。ところが、それが自然の中で自分が発見したものであれば喜んで遊ぶ。

このように、子どもは遊びが生活であるので、自然に遊ばせておけば喜んで遊びそれが有効な遊びになると考えるのは間違っているようである。また、大人が強力に枠組を作り、道具を与えて強制的に遊ばせようとしても、子どもにとって有意義な遊びとは

ならないのである。

子どもの遊びが子どもの成長と発達にとって望ましいものとなるようにしてやるためには、保育者はどうすればよいであろうか。このような問題を吟味するために必要なことは、幼児の発達にとって基礎となる原理と遊びの意味を検討してみることであろう。

三、子どもの発達を助ける指導の原理

自分の興味と能力を十分出しきって、楽しく思い通りの遊びができることは、その子どもの発達を促すことに連なると思われる。そこではまず、周囲からの脅しや制限ができるだけ少ないことが必要である。すなわち、子どもの自由を尊重することである。

次に、幼児は自から進んで遊び、その中で工夫し、発見し、それによって創造性や諸能力を発達させるものである。つまり、幼児の自発性を十分生かすことである。

自由な場で自発的に遊ぶ子どもは、自分の興味に従って行動するものである。逆に、興味のないことはいくら強制しても行な

うとしないのである。遊びの場や環境に子どもの興味を惹く刺激が用意されていると自然のうちに生き生きと遊べるものである。そこで第三に考えねばならないことは、子どもの興味を十分理解しておき、それに合致させるよう環境を整備してやることであろう。

子どもの発達にとって遊びが重要であることの一つは、遊びが直接的で具体的であるということである。子どもの心性は具体的思考や自己中心性に代表されるといわれる。このことは、遊びの特性とよく対応するものである。子どもには観念的で抽象的な学習の方法は不適である。体験を通じた学習こそ本当に役立つものである。遊びはほとんどが体を通じたものである。どのように説明するかよりもどのように体験させるかが大切であろう。

したがって、第四の原理は体験させることだといってよからう。

ところで、具体性や体験は、それぞれの子どもによって違ふこともまた事実である。子どもはそれぞれ個性をもっている。言語表現は不得意でも豊かな感情をもっている子どもあり、運動遊びの得意な子どもいる。子どものもつ個性を尊重しつつ、望ましい子どもとして新たな個性の開発に向って指導していかねばならない。このように考えると、第五の原理として個性の尊重があげられる。

以上述べてきた五つの原理は、子どもの個人的特性に目を向けてきたものであるが、子どもは一人で生活するわけではない。幼稚園でも近隣でも、友だちと一緒に遊んでいるのである。家庭の中でも両親や兄弟姉妹との相互作用を通して生活しているものである。

これらの社会生活の中には一定のきまりや約束がある。基本的生活習慣の確立というのは、子ども自体の個人的発達だけでなく、社会的生活に必要な社会規範に従った生活の基礎を養う必要があるのである。

日常の社会生活と同じように、遊びの中には約束ごとがある。ゲーム遊びには一定のルールがある。ルールが守れなければ遊びは面白くないばかりか、その遊びにも入れない。ゲーム遊びでなくとも、数人で遊ぶ連合遊びなどでは、自分たちで約束ごとを決めないとうまくいかない。「あなたたちはさっちょ、わたしたちはこっちょ」というように領域設定の約束や、ブランコ乗りの順番決めや砂遊びでの協力など、いたるところに約束づくりやきまりの遵守が必要となってくる。集団遊びや協力遊びなどは社会性の発達にとって欠かせない体験学習の場であらう。つまり、第六の原理は社会性の育成ということにならう。

四、子どもの発達にとっての遊びの意味

前節で、子どもの発達を促進する指導の原理を考えたが、それらは、遊びを通してかなり効果的に獲得されるものと思われる。そこで、子どもの発達にとっての遊びの意味を考えてみることにする。

第一は、遊びは身体的発達を促すことである。遊び、特に身体運動遊びは、血行をよくし、敏捷性を養い、体力を身につけさせ、その結果、身体機能の発達を促進させるものである。

第二に、遊びは知的な発達を促進させる。手に取ってみたり、さわってみたりして体験した子どもは、直接問題を見つけ出し、それに自発的に取り組むことによって、認知力、理解力、洞察力などが身についてくる。また、遊びを行なうにはお互いにコミュニケーションを必要とするため、言語発達にも役立つ。このように遊びは知的発達を促進させるものである。

第三に、遊びは社会性を身につけさせるものである。先にも述べたように、遊び、中でも集団遊びやゲーム遊びでは、共同や協力が必要であり、協調性や社会的ルールを守ることなどの社会的規範を身につけさせるものである。

第四に、遊びはパーソナリティ形成に役立つものである。遊びは本来、自発的なものであり創造的なものであるが、同時に自己統制、協調性が必要なものである。また、フラストレーションに対する耐性も必要となつてきて、したがって、情緒的に安定した適応力の高い子どもを作ることに役立つ。

第五に、遊びは治療的役割をもつものである。遊びは自発的で自主的であるため、日常生活における心的緊張をときほぐし、カタルシスの役割をもつものである。自分の好きなことを思う存分行うことによってスッキリした気分になるのはその効果である。

五、自由遊び

遊びがこのように子どもの発達にとって重要なものであることはわかったが、すべての遊びがそのような効果を挙げうるであろうか。また、自由に遊ばせることだけでそのような効果が得られるものであろうか。

筆者は、一般に幼稚園においてとられている「自由遊び」という形態が、果して子どもの自主性と自発性を惹き起こし、子どもの創造性を引き出すように構成されているかどうか疑問をもつ

ものの一人である。

「自由遊び」について教師たちがどのように考え、どのように対処しているであろうか。教師たちは、子どもを自由に遊ばせていることには違いないが、その中で一人一人の遊びを十分観察し、その子どもの自主性と創造性が発揮できるような場になるよう配慮しているであろうか、教師も一緒に遊んで遊んではいるが、多数者集団だけと接触し、少数者集団や孤立者には目がとどいていないことはないであろうか。「自由遊び」という名の下での遊びは多種多様である。その指導は、最も優れたベテランの教師が最大のエネルギーを使って、一人一人の子どもの自主性を育て、発達を促進させる場としては最も適切な場かもしれないが、だれもが簡単に効果を挙げうる場ではないと思われる。中には「何の手も加えないで自由に子どもを遊ばせさえすればよい」という考え方から、放任型の指導を行なっているところもあるように思われる。それもまた「自由遊び」という名称で語られるものである。「自由遊び」は、指導者の配慮の多様さにおいて一斉保育よりもずっと幅の広いものに違いない。おそらく、ある子どもにとっては最も適切で効果的な教育の場であることもあれば、他の子にとっては最も不適切で望ましくない場となることもあるう。

「自由遊び」の中で遊んでいる子どもを観察するとき、極めて生き生きとある遊びに熱中し、自分の能力を十分出しきっている子も見当るが、同時に、自分の興味ある遊びを見出すことも出来ず、ただぼんやりとつまらなそうに立っている子もいる。筆者の観察では、そのような子どもは放任されているか十分いきとどいた配慮がなされていないことが多い。

「自由遊び」は、すべての子が興味に従って自主的に自分の好きな遊びを自分が選んで楽しく行なえるように配慮された遊びのことではなければならない。そのためには、教師は、道具や設備や場所を十分配慮して提供してやるだけでなく、適切な働きかけや援助が必要なのである。子どもはちょっとした働きかけや援助によって、興味を起したり、自己を表出したりすることができるのである。

子どもを好きなように遊ばせてやるのが、いわゆる「自由遊び」ではないのである。「自由遊び」にも当然、一人一人の子どもを伸ばすためのねらいがなくてはならない。したがって「自由遊び」のねらいと指導は、個人指導と集団指導の両面が相互に関連し合ったものであるはずであり、一番難かしい指導であるといつてよからう。それだけに、十分の配慮が行なわれれば、一人一人の子どもにとって最も楽しく効果的な教育状況となるであろう。

六、自由選択遊び

昭和五十五年度の全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会における教育研究集会が、先ほど奈良女子大学の主催で行なわれた。その中の「自由選択活動の指導について」という分科会に筆者も参加してみた。

その中で問題となったものの中に、自由選択活動とは何か、という本質的問題があった。提案や質問などを総合的に考えると、やはり教育現場では、自由選択活動についてはっきりした概念化ができ上っていないのではという懸念をもたざるを得なかった。「自由に選んでする活動」だとか「子どもの自由な活動」だとかいわれていたが、それが子どもの自主性や自発性、創造性や積極性などどのように関連するかがはっきりしていないのである。そのため、その内容が漠然としか理解されていない。したがって、自由選択活動において、教師が枠組や遊びの範囲を設定するのはよくないとか、決めるとすれば具体的にどの範囲のものか、さらに、遊びの用具や配列場所などをどのようにしたらよいか具体的に教えてくれというような質問がでくる。「私のところの園ではこのような設定をしたら自発的自主的活動が多く出

た」という報告ならわかるが、「具体的にどのようなようにしたらいいか」という質問は、自由選択活動の意味がわかっていない証拠である。

教師が一人一人の子どもの発達状態、関心、欲求、態度などを見定め、この子にはこのような刺激が有効であり、このような働きかけが必要であると判断しなければならぬ。このような判断はその子と接触している教師の役割であり、また、その教師しか出来ないはずである。その判断ができるからこそ教師の専門性があり、ひいては教師の生き甲斐があるといえよう。

前節で述べたように、自然のままの環境では、すべての子どもに適切だとはいえないのである。子どもが自主的に自由に選択できるように、いろいろな状況を作り出し設定してやるのは教師の仕事である。そのような環境は、教師には意図された環境の構成であるが、子どもにとっては、自分で選択でき、興味をそそるような自主選択活動ができるような状況でなくてはならない。「自由遊び」が「自主選択活動」の意味をもつようになって初めて、子どもの発達に有意義な遊びとなるのである。

子どもが知的、感情的、社会的、身体的に発達し、一個人の人間に成長していくためには、「遊び」が大切である。しかし、すべての遊びが有効なものとは限らない。子どもの発達を促進させる

遊びは、自由選択的遊びに違いない。いわゆる「自由遊び」を自由選択遊びとして有効に設定し、援助してやるのが教師の保育活動の大きな役割であろう。子どもの遊びが一人一人の子どもにとって有効になるかならないか、適切な保育観と子どもを観察する眼と自主的に判断し、適切に対処できる自主的教師がいるのかいにかにかかっているといえよう。

(佐賀大学)



私の保育



関 史 子

私が『倉橋惣三選集』という本に出会ったのは、幼稚園に初めて勤務してかれこれ五年が過ぎた頃でした。それは学生時代に学んだいろいろな本とは異なり、私にとって極めてショックなものでした。その出会いが五年という保育経験を通して少なからず保育に対して挫折感をもつようになった時だけにその感動は殊更大きかったのかもしれませんが。あるいはまたそれは選集全体に流れる極めて美しい言葉の運びとその精練された内容の奥深さのゆえであったのかもしれませんが。

特に「子どもの心のはだ」、「泣かずにいられない心持ち

への共感」、という個所は私の心を大きくかきたて、遂には私に一生の課題を投げかけ私を心酔させたのです。「幼児の自発的生活を尊重すること」、「ひとりひとりの幼児をしっかり認識すること」、が幼児期の教育の基本的姿勢であり、保育者として常にその原点を確立しておくことが最も重要であることを知りました。私はその当時観念的にはその事を理解できても、実際には何の手がかりもつかめなまま、その後も相変らずそれまでの慣習的な保育に流されていたのです。一クラスの子どもを机の前にきちんと座らせ、その日の計画に従って作業を開始し、絵を描かせ

たり、歌をうたわせたりして、一日を折目正しく過ごすこととでそれにより子どもの成長が必然的にはかれ、保育の目的が十分達せられているのだという単純な考え方でその日その日を過ごしてまいりました。実はその時の私には、そのような方法しかわからなかったのです。

保育における主役は幼児でなければならないということ、百も承知している筈なのに、結果的には私達の保育内容は、教師と母親達の自己満足のためのものに終っていたといえましょう。例えば五月になれば必ずこいのぼりを製作させたり、秋の運動会では整然と並んで画一的に上手に演技させることのみをめざしてまいりました。しかしこのような保育からは一刻も早く脱皮しなくては心の中では考えていたものの、現実にはどうにも変えることができず悶々の日を過ごしていたのです。ところがある日期せずして「自発的生活を尊重する保育」について教職員全員で話し合いが行なわれました。今迄の私達のやってきた保育の反省をしつつ更に奥深い保育のむずかしさにぶつかり、理想とする保育はいかなるものであろうかと、次から次へと発展し、その話し合いはつきることなく、連日行なわれました。その時の教師は全員が自分たちの保育について前向き

な姿勢で考え、その希望にもえた目はすばらしく輝いていました。その結果、幼稚園全体で保育への共通理解を持つために、今迄の経験や知識だけでなく、新しい研究や勉強のやり直しをさせてくれる場を設定して、そこで適切な指導を得よう、保育に関する事なら何でも消化し吸収していこうという積極的な意欲が、全教職員的一致するところとなり、偶々募集^{なまた}中であつたお茶の水女子大学の現職研究へ参加し全員で通いはじめることになったのです。

ここでは個性豊かな多くの先生方と触れ合うことができ、保育の「い・ろ・は」から考え直す必要性和その原点に立つて考える姿勢を教えられました。まさしく「我が意を得たり」という喜びの心境でした。また数多くの幼稚園の保育を見学させていただく機会に恵まれ、私達が現職研究で学んできた新しいと思つていた理論や理想が、現実の幼稚園で、日常の営みの中に具^{そま}さに生かされ、成功しているのを目の前にしたとき、自分たちの識見の狭さに驚くと同時に、ようやく私達の求めてやまなかった真の保育にめぐり会えたという喜びが込み上げてきました。またその見学や話し合いから、子どもの見方、考え方や、子どもにとって、いやひとりの人間にとつてと表現した方が適切なのか

もしませんが、自由がいかに尊いものであるか、また子どもが自主的に活動できることを保障するために、自由な時間を多く与えることの大切さ、などを学びました。

学んだこと、感じたこと、をできるだけ

多く取り入れた保育への転換

保育の見直しの中で非常に興味深かったことは、「コペルニクスの転回」という言葉を耳にしたときでした。これは物事を一方向からだけでなくむしろ逆の立場からとらえてみることも、時には重要なことだと云うことです。かの古代において天動説から地動説へと移行したとき、人間の思考形態を根底から変えざるを得なかったことは、ご承知の通りです。ちなみに安野光雅氏は『あいうえおの絵本』の中の「にじ」の部分で発想の逆転を用いてふだん私たちが気づかないような物の見方を示しています。そして日常生活の中で大変困難な問題にぶつかった時、これらの例のように、いつもとちがって逆の見方でその問題を考えてみることは解決方法を探す手がかりになるようです。そうした発想で私達の保育を見直してみると、どんな保育が考えられるでしょうか。

それは今迄の教師中心の保育を、これからは子ども中心の保育へと転換してみることに。つまり「自主性を育てる保育」を行なうことに結論づけられました。そこで昭和五十三年度より、園長先生の深いご理解のもとに、一斉保育から、子どもを主体とした「自主性を育てる保育」へと大きく転換し、スタートすることになりました。

この保育は子どもにとっては、今迄のように教師の指示に従って行動するのではなく、自分で考え、自分で選び、自分で決めて行動しなければならないのですから、かなり厳しいものでした。また教師にとっても、子どもと一緒に遊ぶ中で、育つためのある方向づけをしなくてはならないし、幼児ひとりひとりを徹底的に観察する必要にせまられるものでした。そして生活の教育化が自主性を育てる保育なのです。指導計画ののっとっていない突発的な事象が非常に多く起こり、それに対する対応指導の問題など、教師としての役割の重大さに遭遇し、今迄以上に教師の力量を問われるようになったことは申すまでもありません。こうして自主性を育てる保育に転換してからの一年間は、子どもも、教師も、悪戦苦闘の連続でしたが、試行錯誤をくりかえしながら、幸にも子どもも、教師も順調に育って

いったのでした。

母親からの抵抗

幼稚園は、子どもと教師とのかかり合いが中心ですが、それだけでは成り立たないのもまた事実です。母親ぬきで保育を進めることはできません。その頃、母親から元町幼稚園の保育に対する素朴な質問（「朝から帰りまで遊ばせっぱなしの保育では、小学校へ行ってから困るのではないか」など）が、たびたび私の所へ届きました。これらは、私達に今まで気がつかなかった新しい問題を提起してくれました。以前、私も保育園から帰宅した我が子に対して何気なく「晋一!! 今日保育園で何を教えてもらったの?」と聞いたことがあります。これは、恐らくどの親でも、自分の子どもの成長をはやく知りたい衝動にかられ、口にする言葉ではないでしょうか。いってみればこれが園に通わせる母親たちの素朴な気持なのかもしれません。その時の我が子の返事を今となっては覚えていませんが、今考えると、実に私はおかしな事を口にしたものだ、恥ずかしくなります。しかし当時保育の勉強をしていた私でさえ、その言葉が何の抵抗もなく口から出ていたのでした。

ですから前に出てきたような母親の質問は、しごく素朴で当り前のことなのかもしれません。そしてその後もある母親から「自主性を育てる保育はすばらしいすばらしいといつて、喜んでゐるのは先生と子ども達ばかりで、私達母親にとつて何がすばらしいのか、今だにわからない」と云われた時、私達教師が自主性を育てる保育の良さをうまく伝えられず、只ひたすら自分達の中だけで、正しいものとして納得していた、所謂自己満足に陥っていたのではないかと気づき、はっとさせられました。

アンケート調査をしてみる

そこで教師と親との間にある問題をより具体的に探るため、アンケート調査を行なってみました。その中の一つで、「幼稚園の保育で、あなたが疑問に思うことは何ですか。」の問に対して出てきた答えは、やはり学習の問題でした。なぜ文字を教えないことが良い保育なのか疑問です。○自主性を育てる保育は賛成するが、先生一人当りのクラスの子数が多すぎるのではないですか（当園ではクラス三十数名）○いやなことでも決められた時間はきちっとしていられる

ような指導をしてほしい。

。毎日ブロックだけで遊んでいるが、子どもの興味が片寄ってしまわないですか。

。幼稚園の始まりと終りにコールサインをして、生活にけじめをつけてほしい等。

なるほどと思われる疑問が出てきました。

この回答の中で一貫して感じられることは、母親が自分の学校生活を思い出し教育の場とはこういうもののはずだといったある先入的な固定概念の中で幼稚園教育のあり方を推考しているということです。家庭に居る時は我が子を過保護に扱い、幼稚園に行かせると、そこは教育の場だから、けじめをつけて厳しくしてほしいというように、教育は幼稚園だけであるものという錯覚が生じているようです。

また何でも早くから子どもに教えた方が早く身につくという考え方を持っていることが感じられました。どうやら情報が氾濫する中で母親自身がそれをうまく処理できずに混乱しているようです。このようなアンケートによって現代の若い母親の一般的な意識を集約することができました

アンケートを生かした母親への働きかけ

前に述べたアンケートにもついで、それをどうやって実際に生かしたらよいのか、職員同志の充分な話し合いの中から次のような四つの問題点が出てきました。

一、母親が疑問を気軽に口に出せるよう、日常親しく会話を交すようにすること。

二、今までの個人面談は一人十分程度で済ませていたが、三十分に延長し、子どもの問題や、保育に対する疑問を母親から聞き納得できるよう説明する。

三、元町幼稚園の保育を理解してもらうために入園から卒業までの二年間に渡り、母親と教師との理解を深めるためのカリキュラムが必要であること。(いつ、どんな時に、遊び(活動)をスライドで見せ、その意義を話したらよいのか、また個人面談や懇談会はいつ頃、何回位実施すべきかといったもの)。

四、作品展を絵画製作の面だけをとりあげた表面的なものから、生活展という名に改め、幼稚園での子どもの生活のすべてを展示するという方法を取り、展示物は目に見える作品だけでなく、形では残らない、いろいろな遊び(活動)＝戸外での遊び、ままごと、こっこ遊び、ブロック遊び)等を、写真にとって展示し、子どもた

ちひとりひとりの発達を理解してもらうために現在に至るまでの過程や、その時の子どもの状態がわかるよう、その作品一つ一つに説明を加え、解説書を作成し母親に渡すこと。

三の母親と教師のためのカリキュラムについてはまだ検討中ですが、他の三つのことについては既に実施をいたしました。今まで不安を持っていた母親も卒業時には、

「この幼稚園に入園させて本当に良かった」

「私の友達にもこの幼稚園をすすめたい」

「子どもに集中力が身についた」

「子ども同志で工夫して長い時間遊ぶ」

と云った話が聞かれました。教師の子どもに対する熱意と我が子の成長を確かなものとして受け止めたのでしょう。

また近所の小学校の教師から「元町幼稚園卒業の子どもたちは総じて、興味をもった事に対しては、非常に意欲的であるが、興味の無いものに対しては決して乗ってこない。扱いにくい点はあるが、自分をしっかりもっている。また障害をもった子どもに対して自然な触れ合いで接し、おもしろいやりのある子どもが育っている。小学校でも良い所

はそのまま伸ばしてやりたいし、芽を摘んでしまいたくないので、どういう保育をしているのか、一度見せてほしい」との申し出があり、私達の保育を善意をもって認めて頂いた時、職員が目にも光るものがあつたのを忘れることができません。

しかし四月になればまた新しい子どもたちが入園すると共に、新しい母親とのかかわりあいが生じてまいります。そしてまたアンケートに出てきたような疑問もたくさん出てくることも予測されます。そうした母親に私達は根気強く、親と教師が共通理解を得て、はじめて成り立つ保育を行なっていることを説き、元町幼稚園で行なっている保育が子ども長い人生においてきわめて重大な意味をもっている事を親と共に私達も確信していきたいのです。

まさに「自主性を育てる保育」とは、子どもに対して、その母親に対しても、教師は想像以上の根気が必要とするものです。私達はこれからも「継続は力なり」という言葉を信じて繰り返し繰り返し、より多くの人たちに「自主性を育てる保育」のよさを理解してもらい一隅を照らす燈として、たゆまぬ努力を続けてゆきたいと思います。

(横浜学園附属元町幼稚園)

倉橋惣三の保育思想の研究

——その成立・展開・継承をめぐって——

下山田 裕彦

はじめに

一人の人間がどのような信仰・思想をもって生涯を生きるか、という問題はどうでもよい問題ではない。生涯をつらぬく信仰・思想を生きているということは、とりわけ知識人にとっての試金石である、と言ってもよいのではなからうか。倉橋惣三（一八八二—一九五五年）は言うまでもなく戦前、戦中、戦後と日本の保育界に君臨した代表的知識人である。最高級の日本の知識人の一人である倉橋惣三は一体、どのような信仰・思想をつらぬいて生涯を過ごしたのであろうか。倉橋を思う時、私はいつもこのような問

を投げかけずにはおれない。

（一）

若き倉橋が内村鑑三（一八五九—一九三一年）とめぐり合い、内村の思想的影響の下で、青年時代を過ごしたことはよく知られている事実である。問題は倉橋が内村の福音信仰をどのように把握したかである。この点について、私はすでに若干の考察・分析をした。(1)ここでは、その時、考察の対象とすることの出来なかった別の資料を用いて、倉橋の信仰・思想の内実が彼の保育思想の形成にどのように影響を与えたかについて論述したいと思う。

次にかかげる倉橋の初期の論稿は、若き日の倉橋が内村とどのように関わっていたかを示しているであろう。

感謝の三日

今井館開館式及び本誌百号

感謝会

倉 橋 生

今井館前のアーチは杉の葉の緑に撫子の紅を彩つて、静肅と雍和の氣を表して居る。静かなる感謝の集あは今日から三日つゞくのである。今井館の開館式は第一日（六月五日）午後二時より行はれた。抑も故今井樟太郎氏の遺志を記念せんが為に其令夫人によりて此館の建てられたのは去年であつた。今日は故人を追悼紀念すると共に、此館をあらためて神の聖前に献げんとするのである。会するもの凡そ五十。グンデルト夫人によりてオルガンは奏せられ、讚美歌は合唱され、聖書朗読、内村先生の祝禱、次に故人の知友諸氏の談話があつた。特に小林錠之輔氏が古き昔を回顧して、故人の信仰の歴史を語り、其当時小林氏が若き今井氏の為に如何に熱心に祈りしか、又如何に驚くべく其祈りが聴かれしかを語られた時には、聴く者皆今日此館あるの源を遠く／＼思ふんだことである。楣間に懸れる故人の肖像はいつも乍に和氣こほれなんとする温容、今日は一人に活くるが如く見ゆる、否、誠に目には見えざれども故人の靈は此席に臨んで、座にある令夫人与愛嬢と

及び知友の心の声を喜び聴いて居らる如く感じた。次に河面氏左の感謝の辞を朗読し、続いて内村先生の談話があつた。以下略（『聖書之研究』十一卷六号「明治四十一年六月」より）

『聖書之研究』一〇〇号の記念集会と今井館開館式に、文字通り集会の中心的人物として活躍した倉橋の、信仰の内実を再び検討することにしよう。

感謝会第二日目に、内村によって読まれた詩篇一一八篇・八九節は次のごとくである。感謝会の第二日目（明治四十一年六月六日）に読まれた箇所を当日も使用されていたと予想される文語体によって引用することにしよう。

（八節）エホバに依頼むは人にたよるよりも
勝りてよし

（九節）エホバによりたのむはもろもろの
候にたよるよりも勝りてよし

右に引用した詩篇一一八篇・八九節の、イスラエルの詩人の信仰告白を、倉橋もまた、生涯の信仰告白として述べ続けようとしたことは想像に難くない。

ところで、『感謝の三日』と題する倉橋の文章の、最後の件（くだり）

一節には次のような感想によってしめくくられているからである。

「終りに内村先生の非戦論と題する講演あり、聴くもの皆雄々しき平和の念に充ち、世界的なる大希望に勇み、茲に感謝の三日を滞りなく、否寧ろ更に新らしき感謝を加へられつつ終った。」

(傍点筆者)

倉橋が内村の非戦論の思想にじかに触れたことは余りにも明瞭なことである。にもかかわらず、倉橋は内村の下を離れ、社会的性格を著しく欠落した保育思想を展開しつつ、日本を敗戦へと導く太平洋戦争の渦にまきこまれ、ついには、その一翼を担う者へと変貌していくのである。⁽²⁾

『感謝の三日』からも、理解できるように、倉橋の信仰の内実が『新しき感謝』にあったことは否定できないであろう。倉橋の初期の論稿の一つ『新しき心』（選集第四卷所収）にもこのような傾向を読みとることができる。つまり『新しき感謝新しき心』こそ、倉橋が内村の信仰・思想から継承したものである。

『新しき心』の最後の件の一節「願はくば信仰の老いに入ることなく、信仰の枯死なからんことを」⁽³⁾との若き日の倉橋の決心は、むなしくも裏切られたのである。

何故、倉橋の信仰が、彼の祈りにもかかわらず、枯死してしまったかについて、くり返す必要はないであろう。ここでは古典的名著『内村鑑三伝』（教文館発行）の著者・政池仁氏の次のような言葉を引用することだけにしよう。

「内村のもとには天下の優秀な青年が林のごとくに、たくさん集まった。そして誰もかも一度は血を湧かせて彼の教えを傾聴したものである。しかしその大部分は、しばらくすると信仰が冷えて内村から離れ去った。……文士小山内薫、文士有島武郎、御茶の水大学教授倉橋惣三……彼らを内村は背教者といって忌み嫌った」⁽⁴⁾

(11)

内村の門下生の中でも最古参の一人倉橋は内村が背教者として最も忌み嫌った一人として、今日では評価されている。このことは何を意味するのであろうか。倉橋の、その後の保育思想の形成過程をさぐることによって考察することにしよう。

ここでは、倉橋の著書の中でも社会的性格の濃い児童保護の教育原理をとりあげ、倉橋の保育思想の形成過程をさぐることにしよう。昭和四年に発行された『児童保護の教育原理』の内容構成は次のごとくなっている。

第一章 序論

第一節 児童保護と教育

第二節 児童教育の要義（上）

第三節 児童教育の要義（下）

第四節 児童の自我感情

第二章 幼児期の問題（上）

第一節 幼児保護事業

第二節 幼児期の教育

第三節 託児所と幼稚園

第三章 幼児期の問題（下）

第一節 あそびの生活

第二節 幼児教育の手段

第三節 幼児保育者

第四章 年少少女期の問題

第一節 年少少女の生活

第二節 児童遊園問題

第三節 児童の娛樂機関

第四節 児童クラブ

このような構成からなる『児童保護の教育原理』の提起する問題は今日の問題である。岡田正章氏の解説の言葉をもって概説す

ると第一章序論は児童保護と児童教育が相即不離の關係にあることを解明し、第二・三章は託児所での保育が幼児保護と幼児教育と一体化されたものでなければならぬことを解明し、第四章は一般的な年少少女期における健全育成に必要な施策のあり方について見解を示している⁽⁵⁾、ということになるであろう。

「新しき感謝」「新しき心」を内村の信仰・思想から積極的に学んだ倉橋にしては珍しく社会的問題を取りあげて、

「虐待せらるるものは、その紐と咎から保護せられなければならぬ。それは児童の目の前に迫る不幸である。社会は取り敢えず其の急に赴かなければならぬ。しかも、それと共に忘れてはならぬのは教育である。……兎に角、教育精神を伴はぬ保護は、真に児童の保護といふことは出来ぬ。児童のあるところ、何時でも、何処でも、必ず教育がなければならぬのである」⁽⁶⁾と指摘する。

このような彼の指摘はおそらくベスタロッツの教育実践にその原型を見い出すことができるであろう。彼は自らを「ベスタロッツに酔える人」⁽⁷⁾と呼んでいるくらいである。次のような彼の叙述は確かにベスタロッツに酔える倉橋にふさわしい。

「ベスタロッツこそは、実に偉大なる保護事業家であつたのである。教育者としての名に於て大をなして居るけれども、ノイホフに於ては農村貧児保護者として、スタンツに於ては孤児の父と

して、今の所謂児童保護に従事したのである。」⁽⁸⁾と。ペスタロッチの教育実践をたえ、彼にあっては、生活と教育とが一つであつたことを、

「生活即教育の真原理に徹底して居たればこそ、児童保護と児童教育とが、ペスタロッチに於て、相離れないものであり得たといえる。」⁽⁹⁾と結論づける。

倉橋が文部省の在外研究員として欧米各国に研鑽を積んだのは大正八―十一年のことである。この時、倉橋が「ペスタロッチ遺跡巡礼」⁽¹⁰⁾をスイスに旅した時の詩情あふるる記録を読むとき、そこに流れているものは「新しき心」を生きた教育者・ペスタロッチへの思慕であることが理解できるであらう。

ところで、今日、ペスタロッチの教育思想や実践の意味を問いつつ時、そこには時代の課題と取り組んでいる激しい社会改良家ペスタロッチの姿が浮んでくるであらう。⁽¹¹⁾言うまでもなく、『子供讃歌』にみるペスタロッチの姿は倉橋が解釈したペスタロッチである。換言するならば社会改革者・ペスタロッチではなく、子どもと共に生きた教育者・ペスタロッチであり、同時に、保護事業家ペスタロッチなのである。

このように考える時、社会の真只中で、苦しみ・虐げられている子どもたちの姿に涙しながらも――倉橋の言葉をもって言うな

らば「衣食を欠くものには衣食が給せられなければならない。虐待せらるるものは、その紐と答とから保護せられなければならない。ぬ。そは、児童の目の前に迫る不幸である」⁽¹²⁾という現状認識に立ちながら、社会の悪にまで立ち入って考察しようとしなければ倉橋の保育思想には社会的性格が欠けていると指摘しても正しいであらう。なぜ彼の保育思想に社会的性格が欠落するに至ったかについては既に触れたとおりである。ここでは、倉橋の卓見であった幼稚園と保育所の一元化について述べ、倉橋の保育思想の深まりと広がりについて考えることにする。

『児童保護の教育』第二章・第三節「託児所と幼稚園」には、昭和四年にして、倉橋が今日で言う「幼保一元化」の思想的根拠を示す次の一節がある。

「託児所は幼児の生活保護の分野に立ち、幼稚園は、その祖フレーベルの教育原理を中心として、教育の分野に超然としてゐる観があつた。しかも、これは、当然一つのものであるべきである。……しかし生活保護を急とすると否とに拘はらず、其の教育の必要に於ては、如何なる幼児にも同一である……此の意味からして、託児所と幼稚園との融合といふことは理論的には、必ずしも新らしい問題ではないのである。」⁽¹³⁾

ここでは社会的問題である託児所の問題が視野の中に包みこま

れている。これは、昭和四年というこの時期の倉橋の社会的活動、例えば、文部省社会教育官の兼任や中央社会事業協会での活動が社会的視野に立って、保育の問題に取り組ませたということも、その一因かも知れない。問題はなんであれ、倉橋の保育思想が、生涯の中で、最も色濃く社会的性格をうつし出していることに注目する必要があるだろう。この時期を過ぎると、倉橋の保育思想から社会的性格が次第にうすくなり、やがて、日本の軍国主義の歩みと同じくするように、彼の歩みもまた、戦時下保育の指導者へとまっしぐらに進んでいくことになった。

ところで、幼保一元化の問題は今日の日本の保育界にあっても、やっかいな未解決の問題である。だから、岡田正章氏の次のような一節を読むとき、私は複雑な思いにつつまれる。

「昭和二十二年十一月、東京女子高等師範学校で開かれた第一回全国保育大会に、全国から参集した国公私立の幼稚園、保育所関係者の手で結成されることとなった全国保育連合会の会長に、倉橋は選出され、幼保両関係者が協力して保育事業の普及発達を図ることに寄与する役割をになった。ただ、倉橋の根底には、幼保においては幼児は差別的な扱いをしてはならないという強い信条がひそんでいたが、彼の人柄は、やがて、全国保育連合会が幼稚園と保育所との各々の保育団体に分裂していこうとすると、

これに身を挺して反対し、その一本化を堅持させようとする程の行動を期待することはできなかった。」⁽⁴⁾

昭和四年には、早くも、幼保一元化の理論的根拠を提示した倉橋ではあったが、今まさに、その実現が可能であった昭和二十二年のこの時期に「身を挺して反対し、その一本化を堅持させようとする程の行動を期待することはできなかった」と言う。人の欲を焼き切る神の義の前に、すべてを投げだすことのなかった若き日の倉橋の晩年の悲劇をみる思いである。

それならば、倉橋の保育思想の消極的な点はなんであったのか。これを、次に考えることにしよう。

(三)

倉橋が日本の保育界に貢献した最大のものは、子どものもつ絶対的尊さを生涯のすべてを傾けて唱道したことであろう。

若き日の倉橋の論稿を資料として次にかかげよう。

聖書と小児

小児 専攻者 文学士 倉橋惣三

世に小児の真価値を認めたもので、キリストのお言葉の如きは

ないと思ひます。吾々は小児の愛らしきことを知つて居ます。丁度美しき花か人形を愛する様に、其柔らかな手や、可愛らしい態度などを見ては、実に可愛くて可愛くてたまらなくなります。又誰れも小児の大切なことを知つて居ます。「白がねも黄金も玉も何かせん、まされる宝子にしかめやも」(万葉集)とは、昔も今も、又永久に変わらない親心でありませう、我れの後継者として、又第二の国民として、其の大切のものであることはいふ迄もないのであります。併し、小児はたゞ愛らしきもの、大切なものである許りではない、又実に貴きものであるといふことも思はねばなりません。即ち云換れば、我々成人は、一方に小児の保護者となると共に、又一方にはよく小児の眞価値を明かにして、充分に其尊敬すべき点を考へなければならぬと思ふのであります。而して最も眞正に其眞価値を説いて居てくれるものは聖書であります。Ⅱ以下略Ⅱ(『聖書之研究』九卷十三号〔明治三十九年十二月〕より)

このような一文を読むとき、彼の保育思想の成立根拠が明らかにされるであろう。倉橋の愛弟子の一人、津守教授によると「倉橋惣三の幼児教育論は、ペスタロッツ、フレーベル、デュイイ、スタンレー・ホールなど、多くの先驅者に負っているが、もっとも多く負っているのは、子ども自身であることである」(10)というが、私は彼がもっとも多く負っているのは、「聖書の思想と子ども

も自身であることである」と言つてよいと思う。

倉橋が『聖書と小児』にみるような詩的才能をもつて、子どもの心を清らかに美しく描く倉橋に私は無条件に脱帽する。例えば次のような短文には、泣く子どもと共に自分も泣かずにおれない倉橋のやわらかい心情が吐露されているであらう。

泣いている子がある。涙は拭いてやる。泣いてはいけないという。なぜ泣くのと尋ねる。弱虫ねえという。……随分いろいろのことはいいもし、してやりもするが、ただ一つしてやらないことがある。泣かずにいられない心もちへの共感である。(『育ての心』より)

内村のもつ詩人的要素もまた彼に継承されたのであらうか。もっともこのような見解とは別に「彼の詩情豊かなわかりやすい文章と、幼児を見る目のあたかさには、大正デモクラシーを背景とした自由さと童心主義が感じられる」(11)という指摘も、私は知らないわけではない。にもかかわらず、若き日の倉橋の心情形成に与えた内村の影響をここでは強調しておこう。

ところで、子どものもつ絶対的尊さを根底にした保育の形態は自由にならざるを得ないであらう。倉橋が「いわゆる朝の会集と

いうものを私は賛成し得ません」⁽¹⁹⁾と言、「よく幼稚園で紋切型の『今日の稽古も済みました』を機械的に歌わせて帰らせますが、……あんな形式的な一斉的な歌の挨拶は私は大嫌いであります」⁽²⁰⁾というのも、その思想的根拠を明らかにするならば、内村

から学んだ聖書の思想に触発されたからなのである。『聖書と小児』の中で、倉橋がマタイ伝十八章三・四節の聖書の言葉「まことに汝らに告ぐ、もし汝らひるがへりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ、されば誰にても此の幼児のごとく己を卑うする者はこれ天国にて大なる者なり」を引用していることからわかるように、神の絶対的尊さに根拠をもつが故に、子どもは尊く、神の輝きを宿す存在なのである。このような児童観が次第に明確に若き日の倉橋に形成されたが故に、倉橋は、自由のなのであるかの理解が不徹底的な日本の精神的土壌の真只中で自由保育を展開できたのであろう。太平洋戦争の激化と共に、彼もまた、戦時下保育の唱道者として不幸にも、挫折したけれども、彼が唱道した自由保育は管理社会とも競争社会とも言われる今日の日本の社会の中に根づき、美しい実をつけている、と言ってよいのではなからうか。

(四)

ここでは自由保育を「大地保育」という名称で、展開・実践し

ている野中保育園（富士宮市野中一二三、園長、塩川豊子）の実践記録から、倉橋の保育思想が、成立・展開・挫折・再生という歴史を生きながらも、今日の激動の社会に脈々と継承されていることを確かめることにしよう。

自由保育の理論的旗手・塩川寿平は「『大地保育』とは、自然環境を最重要視し、大地を土台に展開される自由保育方式の総称で創立以来二十五年の実践と理論の高め合いのなかで、同園園長塩川豊子により『汲みつくすことのできない宝庫である大自然にいとむなかで、子どもたちが育てられていく保育』と唱えられた名称である」⁽²¹⁾と言う。

「子どもたちが育てられていく保育」の中でもどろんこ遊びは最大特徴の一つであらう。

塩川の解説に耳を傾けることにしよう。

「どろんこほど不思議な魅力を持つものはない。きらいな子どもがいらないのである。雨上がりの水たまりを見つけさえすれば、子どもの目は輝き、たちまちいたずらが始まる。……私たちは、不思議でならなかった。そのナゾは、子どもの立場に立って観察することによって明らかにされていった」⁽²²⁾

子どもをおとなの管理から解放し、子どもに自由を与えることが自由保育の最大使命であるが故に、解放と自由を保障する「ど

ろんこ保育」を、われわれは注目してよいであろう。子どもの立場に立って保育することによって、子どもたちが解放され、自由の主体とされるに至る経過をたどることにしよう。

塩川は「どろんこ保育」が子どもたちをとりこにする理由を次の四点に要約して説明する。⁽²⁾

(一) 気持ちがいいのである。手を入れ、足をいれ、体さえもつけて子どもたちは土の感触を楽しんでいる。どろんこ遊びは感覚的な快感があるのである。

(二) 汚れてみたいのである。思い切り汚してみたいという欲求である。べったりと全身どろんこで真黒になるなど、日頃、それが許されるのだからおもしろくてたまらない。

(三) 気楽さである。何よりもどろんこ遊びは特別の技術を必要としない。……誰にでもできて、どのように遊んでもよい自由さがある。……相手が真黒になっていく様や、おでこについたどろんこの顔を見ているだけで楽しくなってきたて笑ってしまう。

第四、もうひとつ別な重要な気楽さがある。それは、作品や行為が残らないことである。だから評価される心配がない。「上手である」とか「下手だ」とか「なっていない」とか「みっともない」という評価が全くないのである。なんと気楽なことであろうか。

このような倉橋の保育思想に根拠を持つ野中保育園の実践をふりかえてみると、子どもたちがおとなの管理から解放され、自由空間の中で自由にはばたいていく姿に、私は感動する。倉橋の蒔いた種が発芽し、成長し、美しい花を咲かせている。その事実を目の前にしてこれを倉橋の保育思想の継承と言わずして他の適切な表現方法を私は知らない。

日本の代表的な保育研究者の一人・平井信義教授も、倉橋の保育思想の影響下にある。

「倉橋惣三先生に会う日が来た。昭和十五年であった。……午前一〇時ごろ園舎に着き、園長室に入っていくと、先生は、机の前に立っておられた。……『平井君ね、今日は心理学を全部忘れてくれたまえ!』と怒ったような口調で言われた」⁽³⁾と平井はまず、倉橋とのめぐり合いから説きおこして、昭和二十八年頃を回想しつつ次のような言葉でもって、倉橋の影響の大であったことを述べている。

「……昭和十五年に初めて先生にお会いした日に、『心理学を忘れたまえ!』と言われたことを思い出した。……この先生のお言葉は、その後ますます強く私の心をとらえるようになった。『心理学を忘れたまえ』、そして、子どもに直接ぶつかって、その心を『直観的』にとらえたまえ……」⁽⁴⁾

このような日本の代表的な保育研究者・平井の言葉を読むとき、私は倉橋が日本の保育界の中ではたした役割の大であったことを改めて思い知らされるのである。

倉橋の門下生・平井の「子どもの自主性の発達を援助するためには、子どもに『自由』を与えることが大切です。『自由』は、子どもにまかせる保育によって実現されます。それには、自由を束縛している状態から、子どもを解放することから始めなければなりません⁽²⁴⁾」という主張に、松田道雄の「子どもが将来、今の文化を否定してあたらしい文化をつくるためには、子どものなかに創意をそだてなければなりません。…そのためには、子どものめいめいにもっているものを大事にしなければなりません。子どもが個性をみせてくれるのは、子どもに自由があるときだけです⁽²⁵⁾」という主張をかさね合わせて読むとき、倉橋の保育思想が今日の管理社会という時代の真只中で、掘りおこされ、新しい革袋の中で、再構築される必要を認めないわけにはいかないだろう。

おわりに

私は倉橋が内村の下を離れてしまったことを残念に思う。それが為、倉橋は社会的緊張関係の中で、保育の研究を押し進める、という姿勢を欠くに至った。おそるべき勢いで変化していく

日本の社会の中で、保育の実践者・研究者は何をなすべきであろうか。うかうかしていては、また、倉橋と同じような誤ちを犯すのではないだろうか。今日は目を覚醒しているべき時である。

註

(静岡大学)

- (1)拙著『幼児保育の基礎理論』の二二四ページ以下
- (2)同右一三七ページ以下
- (3)『倉橋惣三選集(以下選集とのみ記す)』四巻、三五六ページ
- (4)政池仁『内村鑑三』五六一ページ 尚、政池の解釈によると、倉橋は小山内薫と共に内村の門下生の中でも最有力者であった、という。同著、五二一ページ
- (5)『大正・昭和保育文献集』別巻一五〇ページ
- (6)同右 八巻二一ページ
- (7)『選集』三巻一三八ページ
- (8)(9)『大正・昭和保育文献集』八巻十六ページ
- (10)『選集』一巻 一一四ページ
- (11)この点については、拙論『ベスタロッツチ研究——特に『家庭』と『社会の関連をめぐって——』(静岡大学教育学部研究報告第25号収所)を参照して頂けることを願っている。
- (12)『大正・昭和保育文献集』八巻一ページ
- (13)同右 二六ページ
- (14)同右・別巻一五五ページ
- (15)津守真『子ども学のはじまり』二六四ページ
- (16)『幼児の教育復刻記念論叢』一三三ページ
- (17)『選集』一巻九三ページ
- (18)同右 一一六ページ
- (19)『大地保育』二四ページ
- (20)同右 二五—二六ページ
- (21)詳細は『大地保育』二六ページ以下を参照のこと。
- (22)平井信義『児童臨床入門』九ページ
- (23)同右 一三三ページ
- (24)平井信義他『遊び』とは何だろう? 十ページ
- (25)松田道雄『自由を子どもに』一三三ページ

子守唄にみるかわいさから母性を考える

荒川志津代

はじめに

子守唄というのはいうまでもなく、子供を守るときにうたう唄である。だから、子供と接する機会のある人ならば誰でも唄う可能性があり、ことばやメロディーを作る可能性がある。おじいさん、おばあさん、おとうさん、おかあさん、兄弟姉妹、おじさん、おばさん、等々、あらゆる人の唄である。

そしてまた、子守娘の唄でもある。「一般に子どもの守は母親がすることにきまっていたが、子どもを背負ったままでは激しい労働はできないから、そんな場合は老婆か、年長の子どもの仕事になっていた。農村では、年長の、特に女の子が、家事の手伝い

をし、また幼児の守をするのがふつうであった」ところが近世中期以後になると、農村では、ロベラしのために、女の子は、七八歳になると、町へ子守奉公に出されるようになった。そして明治、大正になると、子守娘たちは、一人前の働き手とみなされる。十三から十六、七になると、子守をやめて、女工哀史で知られる機織りなどの他の職種に転職することが多かった。女工哀史ほどには知られていない子守の労働のきつさは、「この子泣くので日に日に痩せる。帯の二重が三重まわる。帯の二重が三重まわらいじゃ。締めて見やんせ四重まわる。」「いやよいやよ子守をやめて早く嫁御といわれたい。」「こんな子守をさらりとやめて当世はやりの機業場^{はたせうば}。」「というように、子守唄の中でうたわれている。

子守唄には、このような、子守娘の立場にたつて、その心情をうたった唄が、比較的多い。それゆえ通常、子守唄の分類には、1 寝させ唄 2 遊ばせ唄 の他に、3 目ざめ唄 という項目が入っている²⁾。これは仲井によれば、「子守女が、その境遇のつらさを嘆いたり、愚痴ったりする内容のひとつとまり」であり、「子守」という労働に伴う唄でもある。

このように、老若男女さまざまの人が、いろいろな思いでうたったと思われる子守唄には、子どもに対する、それぞれの人の思いがあふれている。そのようないろいろな人の思いの中から、特に、子守娘と、子の実母という立場に置かれた女たちの、子どものかわいさに対する思いをとりあげ、その置かれた状況と「かわいさ」という感情の表出のされ方との関係をみていきたい。そして、実母という女が子に対していただく「かわいさ」という感情に、容易にはられる「母性」というレッテルについて、「かわいさ」という感情の表出を規定してくるものとの関係で、「母性」の実体は何であり、それが女たちにどのような作用を及ぼしてきているのか、をも考えていこうとするのがこの小文の目的である。

I 問題提起

「かわいさ限りなし」は だれの唄か

坊やはい子だ ねんねしな

この子の可愛さ 限りない

山での木の数 芽の数

天へ昇って星の数

沼津へくだれば千本松

千本松原 小松原

松葉の数より まだ可愛い

子守唄の中で子どもへの表現として一番多いのは、「よい子」である。例の「坊やはい子だ ねんねしな」というもので、これは通称、江戸子守唄と言われている。中央から地方へという文化の流れの中で、各地に流布していったものと思われる。この「よい子」に次いで子守唄にうたわれるのが、「かわいさ」である。「よい子」と唄う子守唄と「かわいさ」と唄う子守唄の最も大きな違いは、よい子の唄の原形が、ほとんど江戸子守唄一つであるのに、かわいさという唄は、何が可愛いのか、どのよ

うに可愛いかということ、いろいろうたいこんで、さまざまの「かわいい」唄ができてゐることである。それだけ、「かわいい」という感情は「よい子」というより、こまやかなものを含んでもいるのであらうし、また、簡単には割り切れない複雑な感情なのでもあらう。

このような「可愛さ」をうたった一群の子守唄の中で、とりわけひきあいに出されるのが、この「限りなし」ものである。この唄に対する一般の見解というものをみてみたい。

白田甚五郎が彼の著³の中で北原白秋のこの唄への一文を紹介しているので、まず、それを引用してみる。「何といふ細かな愛に満ちた謡か。…略…しんみりとしてお母さんの息つかひまでが動いてゐるやうに思へます。…略…『和子様いとしにかぎりない』と歌つても、和子様はやっぱりお乳をあげるだけの主人の御子です。から、ほんたうのお母さまとはちがひます。」そして白田自身も、「あふれんばかりの母の愛をうたった…」「千本松原小松原といふのが、いかにも母親の無限不尽な愛情を描いているやうである」と記している。また、吾郷・真鍋⁴も、「あふれるばかりの母親の愛情が…」と言っており、最近の本の中で金田一春彦も、「美しい子守唄」という節の中でこの唄にふれ、「限りなく細やかな母親の愛情を表現して完璧の出来栄である」としている。

このように、通常この唄は、母親の愛情を表わしていると言われているが何故であらうか。白秋の言によれば、「お乳をあげるだけの」女と、「ほんたうのお母さま」である女の間には、子どもへの思いのちがいでともいうようなものがあつて、「ほんたうのお母さま」は「細かな愛に満ち」ており、「お乳をあげるだけの」女は、「ちが」うということになる。そしてこの唄は、細かな愛に満ちているから、「ほんたうのお母さま」の愛情を表わしているのだという論法である。ここに一つ、「ほんたうのお母さま」とそうでない女との間に、世話をしている子に対する思いの中に、それほど普遍的な違いがあるのかどうかという問題が生じる。そのためここでは、このような限りない可愛さ、あふれんばかりの愛の表現、それらをうまく盛りあげる情緒、このような要素をかね備えた唄を作り出しえる人はどんな人であるのかを考えてみたい。

口承伝承の作者を考えてみても仕方ないかもしれない。子守唄は子守をする人たちの集団の中で、集団の力によつて生み出されたものであらう。しかし、この限りなしのような詩は、生活の労苦の中に心身ともに埋没せざるをえない人間の中から生まれないうたである。いったん形が出来てしまえば、万人にうたわれる可能性もあらうが、創作の過程に介在した人たちというの

は、ある種の空想やロマンを持つことのできた人たち、現実の生々しい生活から解き放たれた自由な発想のできる瞬間を持つことのできた人たちである。別の言葉で言えば、詩的感覚に鋭かった人たちと言ってもいいし、一種のぜいたくな時間をなんらかの意味で確保できた人といってもいい。だから、この唄の作者達は、山上憶良的な、小林一茶的な、心優しい男たちであるかもしれないし、また当然、女であるかもしれない。その女は、母親であるか、子守であるか、あるいは子の姉やおばであるか、さまざまな可能性が考えられるが、ただ一つ言えることは、この女たちは、現実の生々しい生活において、「千本松原小松原」というような言葉のもつ、美しさ、唄のかもしれない美しい情緒を好んだ女である。

この唄の作者達にこだわってきた。それは何故かと言えば、少なくとも作者は自分の思いをいくぶんなりともこめていると考えるからである。つまり、この唄に表現されている愛情はだれの愛情であるか、ということを考える手がかりになるからである。そして、これまでの考察から、このような詩をうたいだせる心情を持つには、必ずしも、女性である必要もなく、また、「ほんたうのお母さま」である必要もないことを見てきた。ということでは、この唄に表わされている愛情を、「ほんたうのお母さま」に

結びつける必然性はないということである。しかし、作ったのは男であるかもしれないが、表現しているのは「本当のお母さま」の心情だというような論もなりたちうる。しかし、心情というようなものが、コピーのように模写できるものであろうか。もし作者達が、「本当のお母さま」の心情を表現しようとしたとしても、その時作品に表われた心情は、「本当のお母さま」の心情とは違っているのではないだろうか。そして、私達の文化は、このように違ってしまった心情を「本当のお母さま」に結びつけてしまっているゆえに、女たちは、自分たちの生の感情とは別のところで、心情の持ち方を規定されてしまっているのではないだろうか。「本当のお母さま」は子どもに対して、このような心情をもたねばならないと、本当のお母さまもその他の女たちも、そして男たちが、思わされていると思えるのである。

この唄には、心優しい男の想いも、女の想いも、あらゆる人が、ある瞬間、子どもに対して持ちえる、万人の共通の感情がうたわれている。創作の過程に関与したのが、特定の感受性を持った者たちだったとしても、そこにうたわれる感情はだれでも持ちえる瞬間があるから、うたは広まるのである。だからこそ、静岡県沼津地方のこの唄が、さまざまなヴァリエーションを持って、各地にうたいがれてきたのであろう。

さてここで、私たちの文化を問題にしないわけにはいかない。ちよつと考えてみれば、いや、ちよつと考えてみなくても、この唄と母親を結びつける必然性はないのである。そうであるのに、「あふれんばかりの母親の愛情が……」と言われると、齒が浮いたようなことを言っていると思いつつ、なるほどと思わされてしまうのである。そうして逆に、母親のイメージというものを、押し付けられもするのである。だれでも、この唄のような思いを持つことがあるということをしっかりおさえて、「母親」という言葉にまどわされないで、母性というものを考えていきたい。

II かわいさ表出のメカニズム

1 子守唄にみえる、かわいさ、にくさ

『日本伝承童謡集成』⁶は、北原白秋編による採集の偏り、つまり、多かれ少なかれ、「赤い鳥」運動の影響を受けているという難はあるが、それでも、現存する子守唄の採集書としては最もすぐれたものである。この書は、収録した子守唄総数約三五〇〇であるが、その中に、子どもを「よい子」とか「かわいい」と唄っているものが約三〇〇、「にくい」とかいじめるぞと唄っている

ものが約六〇ある。この三〇〇と六〇という数の差は、北原白秋編という童心主義の影響を差し引いても、わたしたちが一般に子どもに対してもつ感情を示していると考えてさしつかえない。つまり、子どもは一般に、「よい」「かわいい」存在であり、時々「にくい」存在でもありうるということである。さて、この子守唄の中では、「かわいい」「にくい」というのは、どのように唄われているだろうか。『日本伝承童謡集成』から分析してみる。

1—① かわいい

かわいいというたわれている子守唄の中で、数の上で一番多く出現しているのは、「可愛いこの子」というように、いわば、子どものまくらことは的に用いられているものである。なぜ「かわいい」のかというような脈絡なしに、子どもに属性として付与されたことばである。「子ども」「かわいい」という、子どもの属性を示すものとして用いられている。

次に多く現われるのが、「寝る子は可愛い」という言い方である。これは明らかに、「起きてほえる子は面憎い」というような唄のうらがえしであり、寝てくれという思いと、寝てくれたときの子どもに対していだくしみじみとした感情である。どんなにいたずらをして「にくい」と思った子どもでも、寝てくれると、そ

の寝顔がたまらなく可愛く感じられたり、また、子守という労苦から解放されたゆとりが、かわいいという感情を呼びおこしたりするものである。

それから、「かわいい」という用法のひとつとまりに、Iであげた「限りなし」ものがある。Iで述べたように、この唄からは、子どもというのはだれにとっても、「限りなく」可愛く思える時のある存在であることがわかる。

そして、ほっぺや目など、特定の容姿を可愛いとうたった唄がある。Eibl-Eibesfeldt は child care の releaser としての特定の容姿について言及しているが、かわいさを感じる生物学的刺激要因とみなされるものが、子守唄の中にもみられることは注目に値する。

そして最後に、「かわいい」という言葉は在っても、その子守唄全体としてみれば、必ずしも、子どもをかわいいと思っているわけではない唄がある。これは主に子守の立場から、子守という労働のつらさにもなう感情を、子どもにからめてうたったものである。つまり、自分の子どもが可愛いなら守も大事にしろ、というように、自己主張の中に子がひきあいに出されたり、なんで可愛がる人の子が、というように、子供への思い自体は非常になげやりになっている唄である。これらの唄にあらわれている、い

わば子どもに対する否定的な感情は、後に述べる「にくい」という唄との関連で考察したい。

なお、少数ではあるが、子守奉公のつらさに対して、子がかわいいので守奉公がまんできる、とうたっている唄があった。守奉公のつらさに対しては、子どもなんか可愛くないと思ったり、子どもがかわいいから、と思ったり、子守の心は揺れ動いたようである。

1—② にくい

次に、にくいとうたっている子守唄をみてみる。

「にくい」ということはほとんどが、「起きて泣く子は面にくい」という脈絡の中で用いられている。これは、1—①でみた「寝る子はかわいい」に対応するものであり、起きて泣く子というのが、子を守る者にとっていかに難儀であったかを思わせる。

次に、泣く子とは別の脈絡で、同じようにつらのにくさをうたったものがある。「なんぼよい衆の嬢やんかとして 人を見下げる面憎い」というように、泣かない子でも、面にくいことがあったようである。

その他には、「寝ねえのか、この餓鬼め」という言い方で、「に

くさ」を表わしたのが、二つあった。また、単に「憎いあの子」といういい方をしている唄が一つ、「にくい」ということはでなく「きらい」となって、「起きて泣く子はきらい」とうたっているのが二つあった。

なお、「にくい」ということとははないが、雇主へのうらみをその子に向けて、子をいじめる唄が、「にくい」という唄とは別に約二〇あった。「この子泣いたら俵に入れて 土佐の清水へおくります 土佐の清水は海より深い 底は油で煮え殺す」"転べころべ 石場へ転べ 石で膝ぶって死ねばよい さぞや親父が泣くだろう" "子守ひどくすりゃ お内儀さんの御損 内儀さんの可愛い子を ひどくする" "兄さよくきけ 姉さも聞きゃれ 子守いじめりゃ 子をつねる" というように、いじめる原因は、子が泣くということ、子の身内のものの子守りに対する処遇へのいわば復讐心である。このような子へのいじめは、憎いとうたっている唄にも多くみられ、たとえば、「面が憎いから 田圃に蹴込み上るとばかりまた蹴込みよいよい」となっている。

2 「かわいい」が表出する時

2—① にくい

子守唄にみえる子どもへの感情としては、「にくい」よりも「かわいい」の方が圧倒的に多いことは前に述べた。また、I問題提起のところでもみてきたように、子どもに対しては誰でも、あの叙情的な思いの中の「かわいさ」を感じうる可能性のあることを述べた。このことから、子どもというのは、万人に対して、「かわいい」という感情をおこさせる可能性をもつ存在と考えてよいだろう。つまり、私たちは、あの、小さな、弱い、生き物を、たいていは「かわいい」と感じるのだ。ところが実際には、子どもが駄々をこねた時などに、かわいいなどとはとても思えない瞬間を持つことは、私たちの生活の中にも見られることだし、また、これまで見てきたように、子守唄の中にもそのような感情はみられる。いったい、どのような状況のもので、かわいく感じられ、どのような状況ではかわいく感じられないのであろうか。

その点で第一に注目できることは、「にくい」という唄のほとんどが、「起きて泣く子」に対してであることである。また、子をいじめている唄にもこの傾向がみられ、「泣く子」は「煮え殺」されてしまうのである。泣き声、ことに子どもの泣き声は、決定的に不快感情をひきおこすことはいなめないが、「にくい」という感情はその不快さだけから引きおこされるのではない。子守唄に、「こんな泣く子を一日負うたら 足が棒になる杖になる」"寝たい

眠たいねさしておくれ 限りの夜業を終わさずに” “この子ようなく 人目にわるい たたくひねると思われる おもわれる”とあるように、おんぶというのが、幼い子守娘にとってはかなりきつい労働であつたこと、おんぶすることによって空いた両手で、おしめの洗濯など新たな仕事をせねばならなかつたこと、子を泣かすと、雇い主からかなりきつく叱られたこと、という要因を見のがすことはできない。つまり、自分に対して無害な存在に対してすらいだく「にくさ」というのは、その対象が在ることによって、主体に対する抑圧的狀況が構築されていく時、主体が、その対象に対していただく感情である。そして往往にして、この目の前に在る対象は、抑圧的狀況を作っている真の物ではない場合が多い。

子守娘の場合、目の前にあつて自分を抑圧してくるものは、小さく無力な赤ん坊であるが、これが子守に対する真の抑圧者でないことは明らかである。しかし子守娘は赤ん坊に対して、たとえ瞬時であるにせよ、にくしみを感ぜてしまう。そしてこのにくしみは、具体的行動のレベルでは、いじめとなつてあらわれる。いじめることによって、子の親（子守にとっては雇主）や、子の近親者に対して、復讐した気分になっている。子をいじめている頃をみると、子の親や近親者への「にくさ」をあらわしているよう

にもみえるけれども、にくいのは、“転べころべ……死ねばよい”と言ひ捨てているその対象である子どもであるのである。このように、子守娘が真の抑圧者を見誤ることについて、松永伍一氏の「子守娘たちは……階級の構造を深く知る力がないから」という指摘は、一面の真理である。

しかし、子守娘が赤ん坊に対して、にくしみを感ぜてしまうのは、それだけの理由ではない。にくいという感情自体が、自分に抑圧的にかかつてくる真の物に関係なく、また、真の物をみつけようなどという気力とも関係なく、ごくごく手近な対象に対して向けられるという性質をもっているからだと思えるのである。つまり、にくいという感情は、まさに目前に在る具体物に対して宿るのであつて、目にみえない抽象物にやどることはない。その場合は必ず、その抽象物のシンボルを要求されよう。そうして、そのシンボル（たとえば、子守にとっての雇い主）を取り出してくる過程で、真の物（雇い主が子守に対してひどい処遇をする背景）は、また見えなくなってくるのである。

だから、にくさの対象にされたものは、ある意味でのいけにえである場合が多い。にくさには、もともとこのような性質があるのであり、見当はずれのにくしをもってしまうのは「知る力がないから」ばかりではない。「知る力」があつても、「にくさ」の

性質上、だれもがそのような誤ちをおかしやすいのであり、それは、男、女を問わず、そしてまた、子守、実母の別なく、生じることである。

2—② かわいい

一方、かわいいと感じる脈絡を子守唄の中から整理してみると、理由なく子どもはかわいいと規定しているような用法と、寝た子に対してかわいいと感じている言い方と、Ⅱで述べた「限りなく可愛い」という叙情的な言い方、それと特定の容姿について、である。

これらの、かわいさを規定している脈絡から言えることは、これらの状況の中には、ある種のゆとりがあるということである。少なくとも抑圧されていない。子どもが寝てくれた後でも子守の体は疲れきっているかもしれない。しかし精神的には自由である。このようなある種のゆとり、それはつまり、現実の生活の生々しい煩事から解放された瞬間に生じるものであるが、そのようなゆとりが、「かわいさ限りなし」というような叙情的な思いをも含めて、「かわいい」という感情をひき出す要因になっているのである。ここで言うある種のゆとりというのは、もちろん、金や暇という物理的条件だけが備わっていることを意味しているのでは

ない。気持ちのびのびとしていられること、絶えずだれかの目を窺うというようなことのないこと、状況のつらさに対する他者からののおもいやりが感じられること、等々、どちらかと言えば、その人の精神の持ち方を規定してくるような、外的条件なのである。

だから、子を泣かして雇い主から叱られることに絶えずおびえなければならなかったり、遊びたいさかりの幼な子が、肩に重荷をしょって遊べなかったり、という抑圧的状况の中では、子守娘にとつての余裕の要因は奪われてしまい、「なんで可愛がる人の子が」というような、他人の感じる子への可愛さを否定したくなる感情がうまれているのである。つまり、子どもに対して、「なんで可愛がる」という思いを持つのは、その人自身がひねくれているからでも、いじわるだからでもなく、かわいいという感情をひきおこす要因を奪われている由なのである。

さて次に、このようなある種の余裕を持ちえる、人と人との関係性について考えてみる。このような関係は、多くは自分より弱い対象との間に生じる。弱い対象との関係においては精神的に畏縮する必要のないことが大きな原因であろう。だから、自分が状況的に行き詰まっていればいる程、また、抑圧されていればいる程、自分より弱いもの、かわいく思えるものを、さがし求めます

る。かわいいという感情のこのような側面に関して、なだいなだは、大名が家臣に向かつて「カワイイやつじゃ」と言うことは出来るが、家臣が大名に「おカワイイ殿様」と言うことはないという例から、へカワイイは愛情の一方的な流れによって支えられていると同時に、それはカワイイと言われるものとカワイイと言うものとの間の差別を、そして差別的な秩序を作ることにもなっている」と指摘している。

このように、かわいいが表出されるには、ある種の余裕が必要であり、人との関係の中でその余裕を最も簡単に作り出しうるのは、差別的な関係の中においてであることをみてきた。「かわいい」と感じる時、感じている方の人間は、その対象より優位なところにいることが多い。対象を、どうしても出来る位置にいるのである。逆に言えば、このような状況がない時、かわいいとは思えないのである。

かわいいとにくいとは、ごく手近な具体的な対象との関係において生じるという意味で、同じ人間関係を基盤とした相対立する感情であり、「かわいい」と「にくい」は容易に転換しうる感情である。そして、子どもに対するかわいさにくさに変わった時、「かわいい」と感じえた時の優位な位置ゆえに、「にくい」が即行動、つまりいじめとして表わされやすい。かわいさにくさのこ

のような機構ゆえに、かわいいとにくいとは、同じ対象に対して生じえるのであり、状況によって、その出現が決定されていると考えられる。

2—③ 生物学的要因について

しかし基本的には、前にも書いたように、子どもというのは、万人に対して、「かわいい」という感情をおこさせうる可能性をもっている。そのことは、生物学的に組み込まれていると言え変えてもよいのかもしれない。Eibl-Eibesfeldt でなくとも、昔から民衆の間では、可愛い目鼻だちについていろいろなことが言い伝えられており、この子守唄の研究の中でも、容姿というのがかわいさを感じる一要素であることを見てきた。「目細鼻高桜いろ」と言わずとも、確かに子どもの顔は、おとなの顔とどこか違って、かわいいのである。

この生物学的要因ゆえに、弱者と強者という宿命的図式を内在しているジュネレーション間でさえ、その共存が可能になっているのだと思われる。つまり、おとなの保護を得られなければ餓死してしまふ赤ん坊や、おとなには所詮体力的にも負けてしまふ弱者である子どもたちにとって、唯一の武器なのである。2—②かわいさ、のところで、かわいいという感情は、強者と弱者という

関係を基に成りたちやすいと述べた。そうであれば、おとな子どもにもともと強者弱者という図式が内在化されているのだから、おとなが子どもを養育していくための生物学的要因は必要ないであろう。しかし、強者と弱者という関係性の上でのみ成り立ったかわいさは、その優位性、差別性ゆえに、わずかの条件で容易に、にくさにも転化してしまうし、ひいては、いじめという行動をも引きおこしてしまうのである。

子守唄の中には、にくいとうたっている唄も含めて、ずいぶん多くの、子守娘の子供に対する残酷な仕打ちがうたわれている。

“つらのにくい子をまな板にのせて 青菜切るようにザクザクとよホー”⁸ということが、現実のことであるわけでは決していないのだが、それほど、にくさは嵩じるかもしれないということであろう。つまり、差別的な関係性を基盤にしたかわいさは、弱者にとっては、いつ拷問に変わるかもしれない、油断できない感情である。だから、生物学的要因は、一面では差別的関係性を基盤としたかわいさと同じように、強者の弱者に対する *care* をひきおこすものであるが、それが他の感情に転化することはないという点で、関係によってひきおこされたものとは明らかに違う、本質的な特質を持っているのである。ところが私たちの社会での子に對するかわいさは、もっぱら、差別的関係性を基盤としたところ

で成っている。おとなしく「寝る子は可愛い」のである。

そうして、生物学的要因が作動するのは、憎さを処理するためになってしまっている。起きて泣いていた子が眠った時、その寝顔がたまらなくかわいく感じられ、泣いていた時のにくさが軽減されるのである。また、子を憎む時は、「面」憎いのであって、子どもの全人格に対してではない。

つまり、私たちの社会の中では、生物学的な *behavior* が人為的な関係性にとってかわられてしまっている。そのため、生物学的要因は、関係性の中で生じた状況の不備を補う形でしか作動しないのである。少しぐらいのにくさは、容姿のかわいさでカバーできるといふ、補強の役目をおわせられてしまっているのである。

そうして、この生物学的要因では補いきれない程、状況要因が悪くなった時、「俵に入れて 土佐の清水へおく」という事象が、現実におこるのである。

最後に

「かわいさ限りなし」といった思いを、実母に特有なものであるかのようにみなす文化の中に私たちはいる、ことをIでみてきた。そして、世話をしている子に對する思いには、本当の母とそ

うでない女との間に、それほど普遍的な違いはないのではないか、という疑問を述べてきた。実母の子に対する思いや態度に、特殊性を付与してくるのが、文化の問題であることは、文化人類学の研究が指摘している。たとえば、ヘヤー・インディアンについての原ひろ子氏の研究によれば、『嬰兒は、その子を生んだ母親が育てなければならない』という大前提が、この社会には存在しない。』のである。そして、『子供を預っている大人は、その子を自分の子と差別せずに、実の親子きょうだいのようにとりあつかい、『いったん貰われた『養子』もいつまた他の人のもとへ預けられるのか、親のもとへ返されるのかは分らないという状態である。』

このような文化人類学の研究は、『女性とは妊娠中と出産後とは、子供に対する感情は、黒と白ほど違っているのである。』¹¹というきめつけに反証を与えるものである。千田夏光氏のこの言は、『未婚の母』でも産めば子がかわいくなって、ホイホイ子殺しをするわけではない、という。いわば女性を弁護した発言なのである。しかし、黒と白ほど違ってくる理由、違わさせられていく状況に対する取りくみがなされていないために、女性へのきめつけの言となってしまうている。わたしたちの社会は、女がこのように変わることを期待してもいるし、女たちはその期待とおのれの

おかれた位置ゆえに変わらざるをえなくさせられているのである。

文化によって女性に与えられたレッテルを剥がし、本来の人間のあり様をさぐるために、何げない素朴な感情が生起しえる状況や条件についての検討が今後ともなされねばならないと考える。

(お茶の水女子大学)

註

- 1 石川松太郎・直江広治編 一九七七『日本子どもの歴史』第三巻
- 2 仲井幸二郎 一九七七『民謡の女』 実業之日本社
- 3 白田甚五郎 一九七八『子守唄のふる里をたずねて』 桜楓社
- 4 吾郷寅之進・真鍋昌弘 一九七七『わらべうた』 桜楓社
- 5 金田一春彦 一九七八『童謡・唱歌の世界』 主婦の友社
- 6 北原白秋編 一九四七『日本伝承童謡集成第一巻子守唄篇』 三省堂
- 7 アイブル・アイベスフェルト 日高敏隆・久保和彦訳 一九七四『愛と憎しみ』 みすず書房
- 8 松永伍一『取材・構成・ドキュメントにつぼんの子守唄』 一九七四 Victor, SJX-2122-4
- 9 なだいなだ 一九六九『思想八月号』「あるこども観」 岩波書店
- 10 原ひろ子 一九七〇『ジュリスト 性』 有斐閣
- 11 千田夏光 一九七五『未婚の母』 双葉社

★海外文献紹介★

Seagull・かもめ

—能力のある子どもの力を開発 するためのプロジェクト—

Childhood Education Apr./May 1980

アメリカの教育界ではいつも「実験」が起きている、というのが読後の感想である。この論文は、近年アメリカで試みられている、「能力のある子どもたち」のために特別に開発された教育プログラムの一つを紹介したものである。

一九七二年、「能力のある子どもたちは、今や無気力と敵意によって打ちのめされている」という報告書が議会に提出されたのをきっかけに、様々な資金援助を背景にして、数百にのぼる特別プログラムが、雨後のたけのこのように全米各地に出現した。しかし、各プログラムがほとんど同時にスタートし、かつその歴史も浅いため、大部分のプログラムは未だ予備実験の域を出ていない。そうした中であって、一頭他を抜いているとしてここに紹介されているのが、ユタ州で行なわれている Seagull・かもめ (Supplying Enrichment And Guidance, Unusual Learning Labs の略) と呼ばれるプロジェクトである。

これはユタ州教育委員会の監督の下に、センターを中心として、能力に恵まれた子どもたちの自尊心、学校に対する関心、および創造的な力を高めようという試みである。従来の教室では、能力のある子どもたちは、何でもできずぎるとか、堅苦しいなどという理由で仲間はずれにされたり、自分の能力を社会に受け入れられるような仕方で発揮することを学んでこなかったために、教師からは反抗的だと思われたりしがちだった。加えて、年少の児童は、なぜ自分が他の子どもとは違う感じ方をするのかを理解することができないでいる。それら様々な原因によって、能力がありながら、歪曲された貧弱な自己像しかもてないでいる子ども

たちに照準を合わせて、このプログラムは展開されていく。

さて実施段階では、二校から四十五名の四、五年生が選拔され、二名のベテラン女性教師がその指導にあたる。児童を選ぶにあたっては何をもって「能力のある子」とするのかが問題となるが、それは、プログラムを応用しようとする各センターが、指導陣その他に応じてそれぞれに決めることが望ましい、としている。選ばれた子どもたちは週一回、それぞれの学校からセンターに集まり、教師や仲間と個人的に知り合う。「どんなものを集めていますか」とか、「歴史上の人物では誰と話をしたいですか」などという質問を通して、生徒一人々々のプロフィールが明らかにされる。自分の興味に即したことを徹底して、納得のゆくまで調べ上げ、やり通していく時間と空間を子どもたちに保障することによって、自分の能力を発揮させるように指導する。祝日などには、それぞれの友人をセンターに招いて昼食会を催し、新たな仲間づくりをする。また、センターには子どもだけでなく地域の大人も参加して、様々な技能を通して子どもたちの成長の手助けをする。例えばあるあやつり人形師は、子どもたちが自分の人形を作り、台本を書き、舞台を作り、みんなの前で上演するのを手伝って、子どもたちの人気を博した。その他、センターでは、「能力のある子どもたち」ととまどう従来の学校の教師たちへの援助

も行なっている。

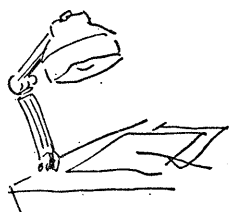
以上が「かもめ」と呼ばれるプロジェクトの概容である。これらは、それ以前の教育プロジェクトにおいてもしばしば見られたことであるが、センターが地域の核としての役割を担っているアメリカならではのことで、と言えるかもしれない。時代は少し遡るが、十九世紀の終りから全米を席巻した「幼稚園運動」において、「幼稚園」は単に教育界の一角にとどまることなく、社会全体を巻き込んだ運動の核となって働いた。そのことに想いを馳せると、これらのプログラム、すなわち、センターを中心とすること、地域の大人が参加すること、さらにこうしたプログラムが次々に生み出されていくこと自体が、まさにアメリカそのものの表出ではないか、という気がしてくる。奇しくも、同じ号の中ほどに、「ヘッドスタート、その過去・現在・未来」と題して、ホワイトハウスでの、ヘッドスタート計画発足十五周年記念大会の記事が掲載されていた。「ヘッドスタートプログラムは、少くとも、さらに五年は延長する計画である」というカーター大統領の発言が、万雷の拍手に迎えられた、と記事は結ばれている。

アメリカの実験は、果てることなく続いていく。

(国吉 榮)

わたくしの

シルクロード ⑦

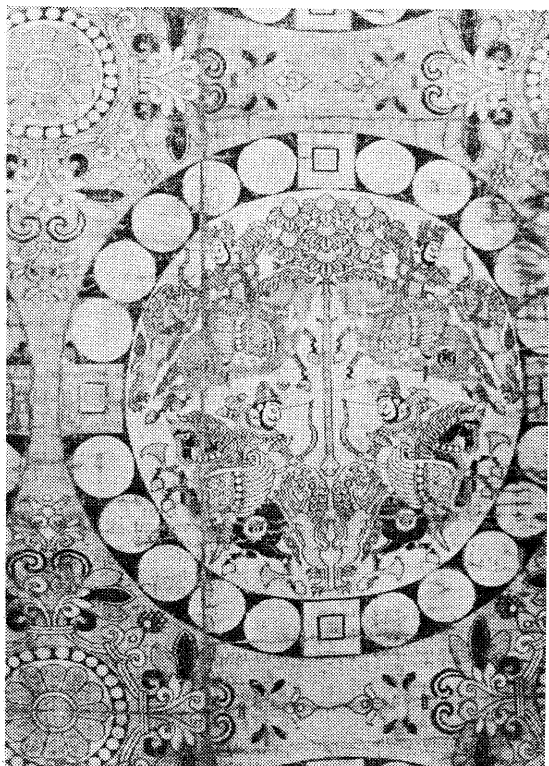


横張和子

シノ・イラニカ錦

明治十七年の夏、E・F・フェノロサ教授が奈良に法隆寺を訪ね、その夢殿を開扉したとき、厨子内に安置されていた観世音菩薩（救世観音）の傍に一まきの織物がたてかけられていました。それを巻きもどすと、日本人にはまことに異様に映る図様の、しかし精緻麗妙な錦が全貌をあらわしました。これが今日国宝となっている四騎獅子狩文錦です。（図版①）古くは四天王文錦と呼ばれ、聖徳太子の守屋討伐の際の旗と伝えられています。

薄茶色の地に直径四―三センチの大きな円文を三つずつ五段に並べた丈二五〇センチ、幅一三四・五センチの雄大な錦です。図柄についてやや詳しく述べますと、円文の周囲に地を藍色にし、四方に重角文をおいて、その間に五つずつの白の珠文を連らねた円帯がめぐり、中に花果をつけた立樹一株を中心に、その左右に天馬にまたがる有髯の武人がまさに襲いかからんとする獅子に向って弓をひきしぼっている情景が上下二段に向きを変えておかれています。武人の服装が天部の像にあらわれている一種の甲冑となっています。るところから四天王文錦の名が出たのでしょう。（図版②）円文が間隔をあけて並ぶところにてきる菱形の間地には開花



◀ 図版① 法隆寺蔵 四騎獅子狩文錦

した蓮華文を内に、細い連珠の円文がめぐり、その四方に忍冬花文のび出ている副文で填められています。永年にわたって朽損したり、褪色によって表面の糸の剝落がひどく、色も鮮明を欠くところが生じてはいますが、地の色はもと赤でした。円帯の珠文は淡紅色、円文の上段の馬および獅子は緑、下段のそれは藍であ



◀ 図版② 四騎獅子狩文錦武人像

らわされ、武人の甲冑は赤、馬面と胸前は藍と白の糸とを一越交替に入れて斜線でしめし、ほかに縹はな赤色などが使われています。織り方は複杯三枚綾緯錦です。
この日本の文様とはいいい難い図柄に早く注目して、明治二十一年「法隆寺紋錦旗考」なる論文を出されたのが、歴史学者の三宅

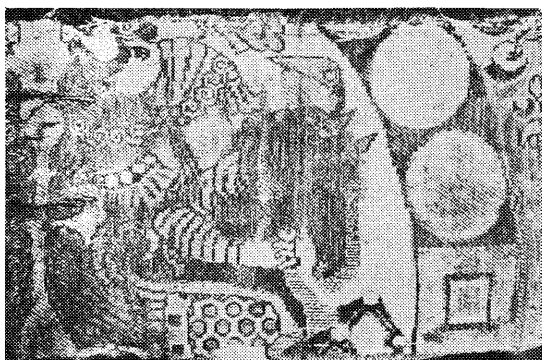
米吉博士でした。そしてこの錦の文様の構成をアッシリア系統とみました。紀元前七世紀のクニンジクの宮殿遺址からアッシュル・バーン・アブリの狩獵浮彫（大英博物館）はどれも名品ぞろいですが、中でも「獅子狩」の名声はとくに高く、その迫真の写実はたしかに嘆賞に値いするもので、古代美術における最もすぐれた動物表現の一つとされています。しかし博士は後になって、この文様の起源はササン朝ペルシアの系統に属するものといわれ、旧説を撤回されました。大正四年、奥田誠一氏が「東洋の古代織物における波斯模様に就て」と題する論文で、「明らかにビザンツ化された波斯式の更に支那化を受けたもの」との解釈を出されました。騎士の相貌が胡人（西方人）の様であること、胡弓をひいて獅子狩をしていること、冠に翼と日月の宝飾があること、天馬にのる神格をもつ人物であることから、これはササン王朝のホスロー二世（在位五九〇―六二八）、あるいはその子孫の帝王の狩獵を描く錦と考えられました。

しかし馬の臀部に漢字と読める印がみえ、上のもものでは「山」、下のもものでは「吉」と読まれることによって、これがペルシアの産ではなくて、中国の産ということで、今日一致した見解となっています。古代裂の研究家の龍村謙氏はこの錦が日本に渡来した時期にもふれて、この錦は中国隋代の作品であると考定されたの

です。龍村氏は人物の冠にホスロー二世と断定する積極的な理由をみとめ、ホスロー二世がアレクサンドリアの織物技術を六一六年にクチシフォンに移入する以前ササン朝では織錦を中国に注文していたと仮定し、六一六年以前にこのようなホスロー二世の肖像入りの広巾の錦が織られたのは隋の煬帝（五八〇―六一八）の時代であり、これが法隆寺と関係の深い聖徳太子が遣唐使を派遣した六〇七年から六〇九年の間に日本にもたらされたとみればこの錦はこの年代をくだることなく隋朝で製作されたに違いないとす

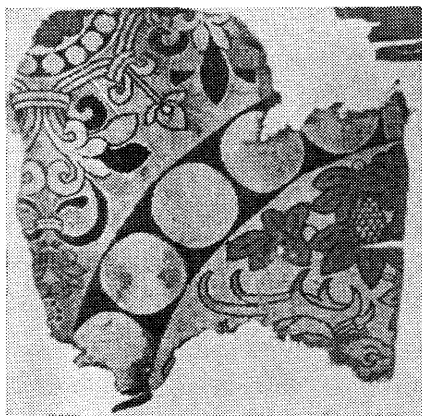
るのです。中国の錦は古くは経錦というもので、それについては、このシリーズですでに何度かお話して来ましたが、それはやがて緯錦に変っていきます。経錦は経糸で模様をあらわし、緯錦は緯糸で模様をあらわすもので、その組織図は十号でご紹介してあります。

そして緯錦の意匠にはペルシア的なモチーフが多いことに基いて、中国隋唐の源流をペルシアに求める説があつて、わたくしもまたこれに参加しているいろいろ考えているものだとも書きました。しかし龍村氏によると、すでに隋代に、中国で緯錦を充分に完成させていたことになり、他方六一六年より前のササン朝ペルシアには緯錦を織り出す技術がまだなかったこととなります。つまり緯錦の技法の中国成立説と、ペルシア成立説の二様あることにな



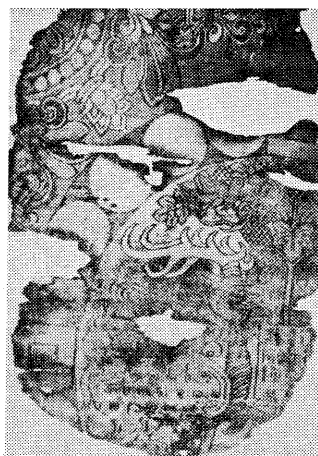
◀図版③

連珠天馬騎士文錦
 アスタナ 337 号墓
 顕慶 2 年 (657 年) の墓
 誌伴出



◀図版④

アスタナ出土の花樹対鹿錦



図版⑤▶

大谷探検隊将来の花樹
 対鹿文錦

▲図版⑥

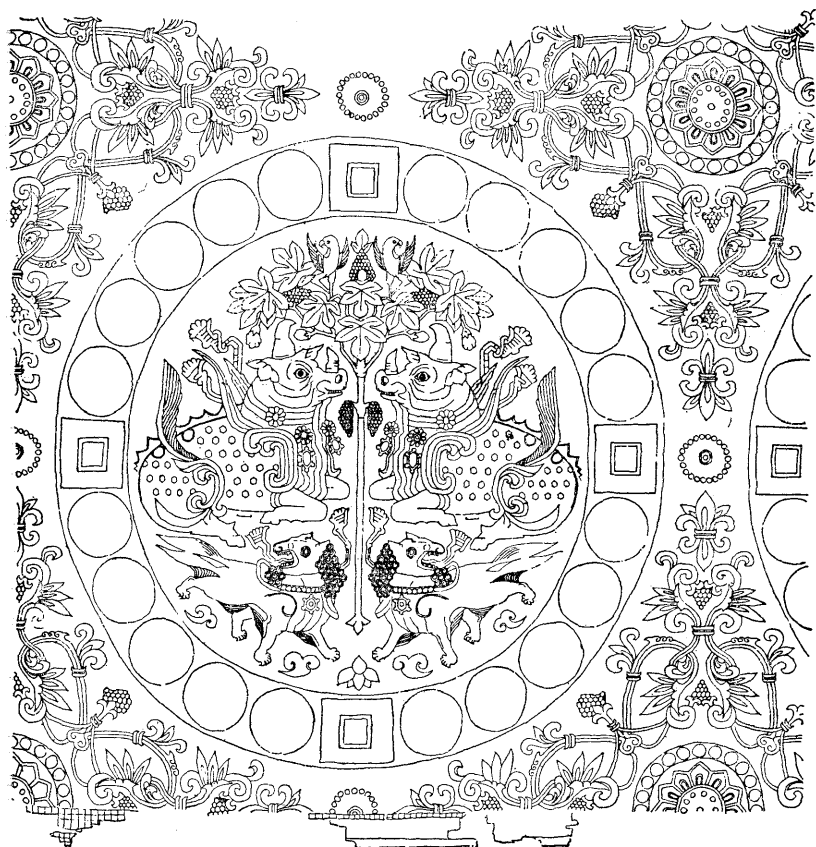
クチャ出土の舍利容器蓋の模様の一部
(東京国立博物館)



ります。今日なおいずれとも確定し難く、なお仮説の段階におかれています。他方、考古学的な発掘からこの種の錦の類例が多数、西域のトルファン、アスタナの古墓群から、発見されました。(図版③～⑤) 今これらを整理して、系統づける必要が迫られてきています。それらの錦の特徴の主なもの、藍地に重角文と連珠文(図版⑥)を配した円環と副文の唐草のスタイルがどれも類似しているということです。そしてその円文の中の図様はさまざまだが、かなり濃厚に、ベルシャ的であるということです。そこで、京都の古代織物研究家である太田英蔵氏は、これらをシノ・イラニカ Sino-Iranica 錦と名づけたのです。この種類の錦は多くが西域の古址からの出土品ですが、わが正倉院の染織品の中にも唯一例ですが伝世されています。犀円文錦といわれるものです。多くの断片になっていて、正倉院の古裂帳に分散して貼りつけられています。先日それを拝見してきましたが、その描き起し図があるので、ここにご覧に入れます。その華麗な副文が美事です。(図版⑦) このような一連のシノ・イラニカ錦については次回からお話を進めて行きたいと思っています。

(山脇女子短期大学)

▼図版⑦ 犀円文錦の復原図（約0.36の1）



遊びの発見 ③

有木 昭久

(あだ名・アリンコ)

ジャンケンチャンピオン

「アリンコとみんなと、これからジャンケンポンを三回します。勝った子はそのまま立って、負けた子と、あいこの子は坐るんだ」

「こうして最後迄残るのは誰かなという遊びだ。後出しなし。いいかな。一回練習してみよう」

「ジャンケンポン」

「ヤッター、勝ったぞー」

「あーあ、負けちゃった」

「あいこ、あいこだー」

ワースと一斉に賑やかになる。

「勝った子はそのまま立って、負けた子とあいこの子は坐れ——」

「ワイワイワイワイワイ」

「アリンコ、あいこはどうするの——」

「今、言ったばかりじゃないか、あいこの子も坐るんだ」

「どうも、あいこで負けていないのに坐らされるのに合点がいかないらしい。」

「とにかく坐れ——」

「そうそうだ。きちんと坐ったかな」

「今のは練習だったね、今度は本当だよ」

「もう一度言うけど、負けた子とあいこの子は坐るんだよ、

イイカナ。では、皆、立って——」

「さあ皆、『アリンコに勝てるようにチチンブイブイ』とおまじないをしてみよう」

それぞれ、手をこすり合わせたり、逆手に組んでその手の間からのぞいたり、手首を押さえて「シワ」の数で出すものを決めている。

「おまじないはうまくいったかな」

「それではいくよ、ジャンケンポン」

「ワー、ヤッター、おまじないがきいたゾー」

勝った子だけは、手を振りあげて意気揚々、負けた子とあいこの子は次々に坐る。

「あれ、アリンコがグーなのに、チョキ出してもまだ坐らない子がいるねー」

「おれ、となりの子とやって勝ったんだー」

「エー（驚きの声）となりの子とやるんじゃないくて、このアリンコとジャンケンをするんだ」

「なあーんだ」

いやはや、一人対集団でやるジャンケンという体験は、子供達の中には全くない。これはなかなか大変だ。

「もう一度言うよ。アリンコ（自分を指して）とジャンケンをするんだ。そして勝ったらそのまま立っていて、負けた子とあいこの子は坐るんだ」

「今勝った子は、立っているね。その子とアリンコともう一度ジャンケンをするよ。坐っている子は残念だけど見てるんだ」

「さあ、おまじないをしよう」



「……………」

「ジャンケンボン」

「オーイ、それは何だい」

「グーチョキパー全部だい」

「アリンコはパーだろ、ぼくは、ここがチョキだもん」

「オイオイ、ちょっと待て、そ、それはないんだ」

子供達は、私が困る様子が楽しいらしい。ジャンケンでただ勝ったかどうかの単純そうに見えるルールが、今迄と違った方法で行なわれると、切り替えが大変むずかしいものであるようだ。

こうして何とか三回ジャンケンをやつとのこととで終えた。残った子は、三十九人のうち三人であった。

「信ちゃん、純ちゃん、静ちゃんが最後迄残ったね、皆、拍手……」パチパチパチ。

「この中で、チャンピオンを決めよう。三人とも前に出ておいで」

「こんどは、三人だけでチャンピオンを決めるジャンケンをするんだ」

途中で子供達の応援の声がかかる。

「ジャンケンボン」



「ヤッター静ちゃんの勝ち——」静ちゃんを持ちあげて「高い高い」をしてあげる。

「アリンコ、もう一度やろうよ」

初めに負けた子、あいこの子は、くやしそう。

「もうやり方はわかったね。それではいくよ」

——三回終——

「光ちゃんのチャンピオン。それでは肩車をしてと、こんどは光ちゃんと皆とジャンケンボンだ」

こうしてジャンケンボンの遊びが始まった。この遊びは、組の中で誰か一人又は二、三人を選ぶ時にも使われるように

なった。ジャンケンだから誰からも文句は出ない。

チーム対抗ジャンケン

この遊びはチーム対抗で行なわれるようにもなった。

「四つのチームに分かれ、各チーム、十人、十人、九人、十人に、かたまって下さい。この間ジャンケンチャンピオンをしたね。今日はね、チームの中で何人残るか、多く残ったグループの勝ちという遊びだよ。始めに、チームの名前を考えて下さい」

『仮面ライダー』『ルンルン』『ドラエモン』『オバQ』

「さあ、チームの名前も決まったから“エイエイオー”をしてジャンケンポンをしよう。いいかな」

『エイエイオー』

『ジャンケンポン』

『仮面ライダー』は四人、『ルンルン』は何と五人、『オバQ』は三人残ったね。ではもう一回勝った人やるよ」

『ジャンケンポン』

「あれー『仮面ライダー』は○人、『ルンルン』は二人、『ドラエモン』三人、『オバQ』は一人」

『仮面ライダー』は全滅だったねー、さあ最後の一回だよ、ジャンケンポン」

「さて『ルンルン』は一人、『ドラエモン』は二人、『オバQ』は○人ということは……ドラエモンチームの勝ち——」

「ワ——」

「さて二回戦を行なうよ」

子供達同志ひそひそと話し合っているグループもある。

『エイエイオー、ジャンケンポン』

『ヤッター——』

ドラエモンチーム全員がパーで私がグー、いちかばちかの勝負に出た。そして最後には、このドラエモンチームが四人残り、他のチームは全滅した。自分は負けても自分のチームを応援し、チームが勝った時には大喜びであった。

チーム対抗身体ジャンケン

「今迄ジャンケンは手でやっていたね。今日は、身体全部使ってやるんだよ。これを身体ジャンケンていうんだ。グーは小さく坐って、パーは手と足をバツと聞き、チョキは手の前に出して、足は前と後にするんだ（見本を見せる）」



パー



チョキ



グー

「一回みんなをやつてみ

よう。まず『グー』そうう

まいうまい、次は『パー』

よおし、次は『チョキ』そ

うだいいぞ。もう一回やっ

てみよう。——もう覚えた

かナ、それでは十三人で三

チームつくろう」

「各チーム皆と相談をし

て、グー、チョキ、パーの

どれか一つだけ決めて皆同

じ格好をするんだ。決まったら手をきらきらして下さい。

——決まったようだね。まず始めは、アリンコと皆のチーム

とジャンケンをするよ」

「エイエイオー、ジャンケンポン」

「アリンコはグーだからパーを出したチームの勝ち」

「ワ——」

「あれ、一人だけ違っている子がいるよ、残念でした——」

「この勝負は各チーム〃〇点がさあもう一回やるよ、相談

して下さい。用意はいいね」

「エイエイオー、ジャンケンポン」

勝ったチームは口々にワーワーといって歓声をあげる。だ

んだん子供達も燃えてきた。

「ああ、又いくよ——」

子供達は全員かたまつて、いつの間にか何を出すか決定す

る。何度か繰り返して三点のところが優勝した。大分慣れて

きたのでチームの対抗することにして私が審判になった。

「こんどは三つのチーム同志が身体ジャンケンをして勝負

を決めます。勝っても、中に間違った人がいたらアウトだ。

さあ、チームごとに集まって相談してごらん。用意ができた

ら、きらきらだ」

「用意はいいね、エイエイオー ジャンケンポン」Aチーム

はパー、Bチームはチョキ、Cチームはパーを出す。

「ただいまの勝負、Bチームの勝ち——」

「ワ——ヤッタ ヤッタ ヤッタ」

「第二回戦……ジャンケンポン」

Aチームはパー、Bチームはグー、Cチームはパー（しか

し二人間違えてチョキを出す）

「この勝負、Aチームの勝ち——」

Cチームの子は間違えた二人にちゃんとやんないから負け

ちゃったんじゃないという。少しペソをかく。

「第三回戦いくよ……」

中には、他チームの出すものをスパイしに行く子も出てく

る。「あそこは『バー』だよ。」そこで「ジャンケンポン」

「あれ——おかしいな、『バー』って言ったからチョキにしただけど『グー』を出している……」

わざと聞こえるように相手もしていたのだ。この子は皆から「ドジ」と言われる。英雄になるか、失意のどん底に落ちるか大変な冒険でもある。あたたった時には、皆からもてはやされる。だんだん各チームの作戦は巧妙になった。その後インディアン、狐ジャンケンにも変化していった。

グー、チョキ、パー集合ゲームへ

同じもの同志集まる遊びはここから生れた。集合ゲーム（前回の「二人はなかよし」参照）の中で、同じしるしを出した人が集まるのに一番よくわかるグーチョキパー「これだ——」
「これからみんな一緒にジャンケンをしよう。ジャンケンで同じものを出した人は集まって下さい。一度出したものは変えないでね、いいかな。たとえば、もし『グー』を出した

ら『グー』『グー』『グー』と言って同じグーの人を集めて下さい。こうして早く集まって坐ったチームの勝ちという遊びです」

「それではいくよ ジャンケンポン」

「グー」「グー」「グー」「チョキチョキ」「パーこつちだ」

ワイワイ賑やかなうちに次第に各グループが固まってきた。

「だいたいそろってきたので「ヤメ——」

「ここは何チームかな——」

「パー」

「ここは」

「チョキ」

「こつちにもチョキがいるよ——」

「あっ残念でした、チョキチーム、アウト——」

「ここは」

「グー」

「だいたい上手に集まったね。一番早かったのは『グー』

「ん、この勝負グーチームの勝ち——」

「——」と喜びの手をあげる

「二番パーチーム」

「ワ——」

「三番グー ぶりっかす」

しよぼん。ここで「元氣を出して次にガンバレよ、負けた時には、声を大きく出して、一番勝ったような顔をするんだ、いいナ」

「三番グーチーム ぶりっかす」

「ウォー————ウォー……………」

「いいぞいいぞ、さあ今度はがんばれよ」

こうしてグーチョキパーの集合ゲームが始まった。燃えた燃えた。

「ジャンケンポン」

「グーグー」「パー」「パー」「チョキ、お前もチョキだナいのしよに手をつなごう」

グーチーム、パーチームが同時にすばやく集まって坐った。チョキチームは二手に分かれて、お互いに「こっち来いよ」「お前こそこっち来い」と孝と満男が張り合っている。

クラスのワンパク坊主二人である。まわりについた子は、どっちに行つていいか、うろろうしている。最後には孝のところに誰もいなくなつてしまった。

「ヤメ——この勝負グーとパーチームの勝ち」「ワ——」

「チョキチーム ぶりっかす」「ワ——……………」

一人ぼっちの孝も大声で「ワ——」といった。遊びがわかつてくると、子供達も色々考え始める。

グーチョキパーから、くだものへ

孝の動きから、パツとひらめいた。

「あつそうだ、さつきは手でしるしが見えたし、口で『グー』って言えたね。今度は口だけで『果物』の名前を言つて、よく人の声をきいて集まる遊びだ」

「皆、頭の上に手をのせて、自分の言う果物の名前を覚えておいて下さい。アリンコが『果物とび出せボーン』と言つたら、果物の名前を言いましょ。そして同じ果物の名前を言つた人を仲間になつて坐ります。できたら、一人に一点あげるよ。こうしてたくさん点をとつた人の勝ち——、ではいくよ『果物とび出せボーン』」

「ワイワイ お前なあに 俺、レモン 違うか」「レモンレモンレモン」あちこちで色々な果物がとびかっている。グーチョキパーと違つてしるしがないので声だけがたよりである。それでもいつの間にか、そろつたようであちこちに小さな固まりができた。

「ヤメ——さてこのチームは何ですか」

「パイヤー——」

「おつ、すごい知っているね、他にパイヤーの人はいませんか、いないようですね、うまくできました……合格一点」

「ワ——」

「さて、ここは」

「バナナ」「こっちもバナナだよ」と少し離れたところから声が聞こえてきた。

「残念でした。ハズレ——」

「ウヘエ……」

「ここは一人だけ何かナ」

「キウイ」

「オ——他にいませんか、いない。よかった。合格、一点」

「ワ——」

次々に聞いて歩く。一通り終って再度行なう。「果物とび出せポーン」

だんだん他の人が言いそうもない果物がとび出してくる。

「リンゴ」と「黄色いリンゴ」、「イチゴ」と「野イチゴ」、

「みかん」と「オレンジ」まぎわらしい名前がとびかう。

同じ仲間が集まる楽しさと、また人が言わないような名前

を考え出すところが、この遊びの面白いところとなった。乗り物、テレビ漫画、虫、花、動物などにも色々変化した。

まとめ

何気ないことが目にとまり、ハッとさせられ、それをつかまえて、新たな工夫が生まれた。今年はあるクラスでは題名を子供達が考えて、それを次週に行なうというように、いつの間になつてしまつたが、これも一つの方法であろう。

一週間に一度、しかも五〇分の間、講師という立場で、幼稚園の先生とペアーを組んで行なつたこれらの遊びは、現場を続けることのできる先生にとって、もつともっと楽しい変化が生れるだろうことを期待している。

朝の出会いの時間で、その日の遊びが全く違う、意図していかない方向に進むことがしばしばあった。いや進んだためしかなかったと言っても過言ではない。

一週に一回の出会いのほんのわずかの時間の中に、全エネルギーを傾けられる喜びを、私は持った。昔から伝えられてきた遊びの中に、歴史と意味を感じ、遊びの原点をさぐるうとしてゐる今日この頃である。

(日本児童遊戯研究所)

自分の全力を使って動くのは何と気持ちのよい事だろう。それが鬼ごっこでもブランコでもスキップでも、そして大げんかであっても、その時の子供達は皆よい顔をしている。息をはずませて……という機会がもうほとんどなくなってしまうた大人達も、よい顔をしている子供の姿から自分達の幼なかった日々を思い浮かべることができる。

セーターがいるようになってきてから、なぜか子供達の中ですもうがはやってきた。

すもうはいやおうなしに全力を出さなければならない動きである。かけっこではかなわなかった子供や、一歩出遅れていた子供も、すもうを通じて思わず出てしまった自分の力に驚いている光景がよく見られ、はた目にも、気持ちのよいものである。

〔短 日 断 章〕

最初はそれぞれ同じ位の力の子同志でとっているが、大体皆の強さがわかってくると、そのうち自分より強い者を相手にではな

す も う

く、弱い者を相手にやろうとする傾向が生まれる。これは、前向きな自信というよりむしろ、守りの自信というべきもので、一般には歓迎されないかもしれないが、このことから、子供達がいかに体を動かすことに自信を持つとうとしていくかわかる気がする。そうなってくるとその子が自分より弱いと思っている者に対して「やろうよ」と誘いかけ、挑戦された子が、「いやだよ」と答えるパターンが生まれ、誰の挑戦を受けるかによってその子の自信を推し計ることができる。この「自信」とは何かと考えてみると非常に興味深い事が思い浮かぶ。少々逆説的になるが、その自信とは負けてもよいという自信ともいえるのではないだろうか。人間誰でも、大人になっても負けるのは好きでない。しかしたとえ負けた時にも自分の負けを笑えるゆとり（自信）がなければ勝負は常に勝つか、又はやらないかのどちらしかありえない。

子供の気持ちがそのよう

に動く時、私は彼らにとっ

て重宝な存在になる。なぜ

なら教師（大人）に負けて

も当たりまえという気持ち

が子供達には一方にあり、

又時々教師は負けてもくれ

るからである。従って、自

信のない子供ほど、私とすもうをとりたがり、仲間の中で

自分の力を出しきっていない子供は、私としかとらない。

これは表面的にみれば、子供が子供同志で遊べていない状

態であり、教師に遊んでもらっている状態であるかもしれない。

しかし私はたとえそうであったとしても一向にかま

わないと思う。なぜなら第一にその子は少なくともすもう

から逃げてはいないし、寒い中で体を動かすことに面白さ

を感じており、さらに仲間と同じ遊びをするということ

で、友人との関係に対して気持ちが向かっていると私には

思えるからである。

実際子供達とのそんな日々が続くと、だんだん子供達は

豊田 一秀

「おいトンタ（私のこと）。

本気でやるうよ」等と言

出すものであり、いつの日

か、私が彼らのすもうに入

れてもらえる日を楽しみに

しているのである。

冬の日は寒い。はく息も

白い。だからこそ外のピリ

出すのではなしに。

ッとした空気の中で遊びたいものだ。決して部屋から追

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



七十九巻の終りに

津守 真

ある日の保育のことである。ひとりの男児が、ポスターカラーの色えのぐを、指や掌につけて、フィンガーペイントのように使いはじめた。その子どもは、その活動の中に魅きつけられて、相当の時間を過した。私がその子を見たときには、手足に絵の具がいっぱいついていて、その子がよく遊んだことを物語っていた。その子どもの日頃の遊び方には、もう一步、十分に遊びきれないものたりなさを感ぜさせるものがあつた。この日は、どのようにしてかよく分らないが、担当の保育者は、その子が思いきつて遊べるように誘うことに成功したのだと思つた。

ちやうど、たまたま、この雑誌に何回か連載を書いておられる、オランダのユトレヒト大学のフェルメール女史が来日されて、この同じ場面を観察しておられた。保育のあとで、話し合いの時に、フェルメール先生も、この場面のことを話し出された。

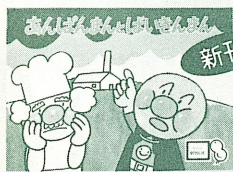
その第一は、この子どもが、掌や手で、どろどろの絵の具に、じかに触れて遊んだことについてであつた。子どもの保育においては、まず、おとなと子どもとの間の信頼関係がたいせつであるが、それは、子どもがおとなに、身体面で、皮膚を通して、じかに触れることからはじまる。それと同様に重要なことは、子どもが物質とじかに触れることである。それは、子どもにとっては、まだ形をなさない、渾沌とした感覚的体験であるが、直接に水や土にふれることによって、子どもは、自分をとりまく物の世界に親しみを感じるのである。

その第二は、この絵の具を掌につけてこすりつける遊びの中で、ほんの一瞬間のことであるが、この子どもは、指先にえのぐをつけて、一本の線を引いたことについてであつた。それは、指の先のえのぐが、形を作り出すことを、子ども自身が発見した体験である。それは、掌と物質とが一体をなしている段階から、自分と物質との間に、距離を見出したことを意味する。フェルメール先生は、この日の活動には、子どもが、自分で、このような発見をする自由があつたことを指摘し、その重要さを強調された。

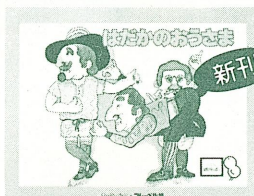
子どもの創造性は、人の目に立つような大きな活動や作品にあるのではなく、慎ましく、小さなものである。それが大人の文化を形成してゆく力になる。幼児の教育は、子どもとの間の毎日の小さな、人間の営みの積み重ねである。決して、巨大な構造のプログラムを実施することではない。この雑誌も七十九巻を終えるが、その間、人の目にふれないところで、このような保育の営みがたえることなく続けられてきたことを、また、これからも続けられるであらうことを思うとき、人の世界の豊かさを感じさせられる。

フレーベル館がおくる家庭紙芝居の決定版!! B5変型 本文12場面各500円

家庭版 幼児 かみしばい



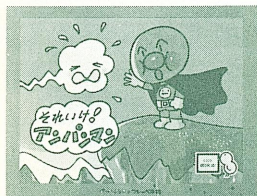
あんぱんまんといきまん
文／絵・やなせ・たかし



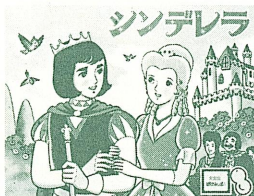
はだかのおうさま
文・小沢 正 絵・田名網敬一



あかずさん
文・森山 京 絵・手塚プロダクション



それいけ!アンパンマン
文／絵・やなせ・たかし



シンデレラ
文・伊藤海彦 絵・手塚プロダクション

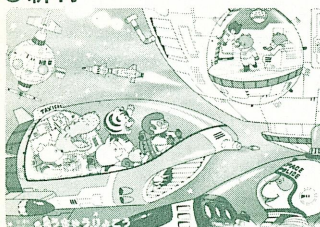


やさしいライオン
文／絵・やなせ・たかし

幼児用 定価 各300円 各<50ピース>ビニールケース付き

ジグソーパズル

●新刊

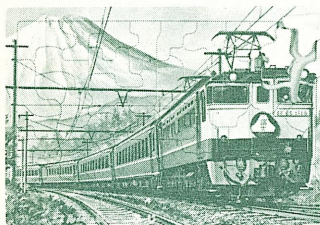


うちゅうりょうこう
●絵・辻 忠直

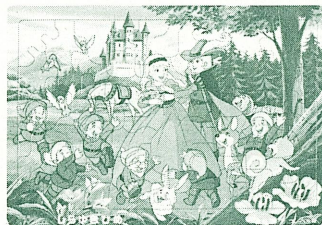
●新刊



ヘンゼルとグレーテル
●絵・角田 紘一



フルーツレインふじ
●絵・藤井 康文

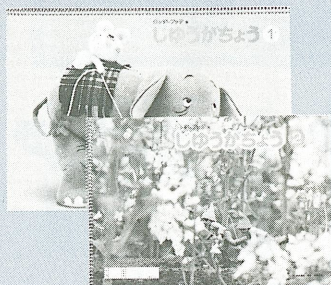


しらゆきひめ
●絵・草間 真之助

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

楽しさそろった!!



56年度

新学期用品

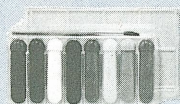
より豊富に種類を取り揃えました。
更に内容を充実しました。

保育教材は、幼児が楽しみながら、しかも使いやすさを充分考慮して作られています。
このほかにも多数取り揃えていますのでご用命ください。

まんてんぱすてら



まんてんくれよん



すいさいえのうへ



しーらゆきマーカ-

キンダー粘土



組別名札



クローバ



イチゴ



はさみステンレス製(大)



お誕生カード(大)



すいさいえのうへ

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館